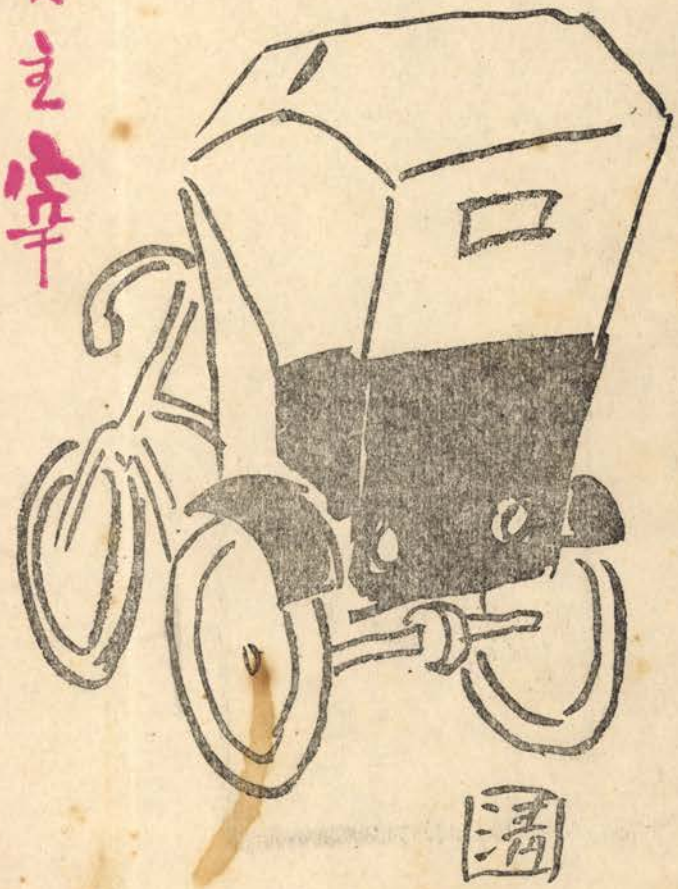
川柳の雑誌

Pensoj flugas trans la land - limon

Senryu Zasshi

麻生路郎☆主宰



四月號

No.275

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿五年四月一日戸行第五種第四號
（毎月一回一日發行）創刊大正十三年・通卷二百七十五号

續川柳講座 (24)

麻生路郎

皮肉味の句に就て

皮肉味の句に就て少しく述べて見ましよう。

樂斎の句に、

竹ニヨウで饅食はうと歌仲間

と云うのがあります。この句のヤマは竹葉と云はず竹ニヨウと云つたのにあるのであります。万葉々々を口癖にしている歌仲間のことであるから竹ヨウでも竹ニョウと云いかねないのを皮肉つたのであります。しかし、斯うした文字の上からの皮肉には何んとなく厭味があつて皮肉の上乘なものとは云へないのでありますが、その点、二柳子の

あけにくい障子は地震からでなし

の句からうける皮肉味は、一段と高いところにあると云つていゝでしよう。それは前句には作爲があり、後句にはそれがないからであります。

作爲のない皮肉とは、どんなものかと云うことを、極く簡單に会得して貰うため、慶大の池田潔教授の「ユーモアに就て」の文中からその一部分を引用させていただくことにしよう。

赤土に亞の如く櫻五六本の植わつた營庭では筋金中尉の科学研究がつづけられてゐる。

「おめえたちがよう、大阪に旅行中、留守宅から赤紙が届いたとする。すぐ汽車で帰るとする。途中鼠で鉄橋が落つこつて長良川が渡れないとする。そしたらおめえたちどうするか」

おめえたちは一斉に各自、鼻の頭を睨んでこの難問題を考へる。

「そら、そこにゐる青んぶくれ、答へてみい」

「判りません」

「バカヤロー」

バカヤローが四五人つづくと、威勢よく手を挙げたのが、「ハイッ！ その時は赤紙を日にくはへザンブと濁流に躍り込み抜手でこれを泳ぎ切つて大元帥陛下の御許に參じますッ」長良川の鵜みたいな奴がゐる。大方、前の晩、町内の青年團あたりで入れ智慧されてきたのであらう。

「その精神まことに天晴れである ぞ。いゝかおめえたち、判つたか」

中尉殿御機嫌である。「そして今度は木曾川までくる。又、橋が落ちてゐる。今度はどうするか」一同考へ込む。又、數名のバカヤローが枕を並べたが、と、「ハイッ!! その時は赤紙を日にくはへザンブと濁流に……」眞似する鴉あぶない。と首をすくめると、なんとなんと、教官殿、莫爾として「その精神大いによろし、今の兵はよく覚えたぞ。一同大いに見習ふやうに」まさに御満悦である。

帝國陸軍、噫。

「次に天竜川であるが……」「ハイッ!! 赤紙を日にくはへ……」

「大いによろし」「次に大井川……」

もっかうなると緊急平和号の比ではない。風邪一つ引かず、赤紙を日にくはへ、とつとつと馬入川に差しかかって

と云うところまでで打切ることにいたしますが、この文中の内容にはいささかの作爲もありません。曾ての帝國陸軍の実況をありのまゝに報道されているのでありまして、決して皮肉を飛ばすのが池田教授の本意ではありますまいが、文中いたるところに、皮肉味が感じられるのであります。

前掲の「あけにくい障子は地震からでなし」の句にしましても、地震から障子があけにくくなつたのであれば、たとえあけにくくなつたにしても、自ら慰められるところがあるのでありますが、貧乏生活が、その原因であることを自嘲して皮肉を感じさせられたのであります。

次に現代作家の皮肉味の句を例示し、少しく解説を試みることにいたします。

千慮の一失万引の忘れもの (電象)

乘込みにおやまらしいは見当らず (柳珍堂)

信用があつて集金人で果て (一光)

方針を問はれて女給とも云へず (スエノ)

玉の輿羨やむ様な顔かいな (静雲)

火火事へ村のポンプは修理中 (七面山)

親切な医でよけいな注射もし (美秋)

サンシーも買えず留守郎留三郎 (喜由)

皮肉にもランプを灯す文化の日 (斜水)

お悔みに行く鏡台に手間がいり (美奈子)

「千慮の一失」の句は、千慮の一失と大げさな云い方をしたところに、ユーモアを感じるし、人の眼をかすめて、万引きでもしようと云う、ずるい人間が、ウッカリ、そこへ立てかけておいた傘を忘れて帰つたところに皮肉味が感じられるのであります。

「乘込みに」の句は、俳優の乘込みを詠んだものでありますが、何れも素顔のまゝで車上の人となるので、ヒゲ剃のあとが、蒼々としていて、一向女形らしいのが見当らず幻滅の悲哀を感じさせられるところに皮肉があるのであります。

「信用があつて」の句は、あの人なら間違いないと信用せられたばかしに、集金人で一生を終つたと云うので、皮肉な観方の句であります。若し信用されないで、集金人をやめさせられていたら、もつと出世していたかも知れないのでありますが、あの男なら間違いないと信用されるほどに、正直で氣が小さかつたので、却つて集金人で果てたのであると皮肉な観方をされたのであります。

「方針を問はれて」の句は、身の振り方を相談に行つた時に、一体どんな方針ですと聞かれ、眞逆女給をする積りで

すとも云えず、そはれ、そのと口ごもつているところに一種の皮肉を感じたのであります。

「玉の輿」　句は、ある娘が、誰それさんは、大家の息子さんに見染められて、全く玉の輿ですわネと、いかにも羨ましそうに云つているが、その娘の顔を見たら、玉の輿を羨やむにはあまりにも不縹緻なので、皮肉の感を懐いたので、斯くは詠んだのであります。

「大火事へ」の句は、眞逆の時の用意に、出しにくい金を出し合つて、購入した村のポンプが肝心の大火事の時に、修理中で役に立たないところを皮肉つて詠んだのであります。村のポンプに限らず、世の中には斯うした皮肉な出來事がいくらあるか判りません。

「親切な医者で」の句は、ホントに親切な医者と云うよりも、下手な医者を意味するのではないでしようか、詰り流行らないので、たま〳〵來た患者で、少しでも稼がうとしているさまが、うかがはれるではありませんか。そこに余計な注射もするので、それを親切な医者と見るところに皮肉を感じることが出來ます。

「サンシーも買えず」の句は子どもを育てられる、富裕階級の人たちが、避姙藥を買うて涼しい顔をしているのに、サンシーも買えぬ貧乏人階級には、ヒヨコ〳〵と子が生れるので、そこでもうこれ以上生れぬようにと留次郎だの留三郎だのと云う名をつけて見ても、一向ききめのないことを皮肉つて詠んだ句であります。

「皮肉にも」の句は、文化の日に停電してランプを灯したことを皮肉つた句でありますが、豈ランプのみならんやで今の日本の現狀は、あらゆる方面で斯うした皮肉な事象にブツ突つかつているのであります。

「お悔みに行く」の句は、お悔みに行くのに、そんなにめかさないでも、よかりそうなものなのに、そろ〳〵鏡台に向い、いつ果てるとも判らない念入りのお化粧ぶりを皮肉つた句であります。

以上の解説で、大体皮肉味の句の輪廓を理解されたことでしよう。要するに、皮肉味の句は穿ち味の句の中での特異性を持つた句だと云えるので、少しく検討を加えて見たのであります。

不朽洞句帖

麻生路郎

未亡人子が月給をとりはじめ
内職を投げ出し春の窓に立ち
時も時暗い映画を観て帰り
往診の誤診を飯を食いながら
落ちついて呑むは雨傘持つていず
PTAこゝでも勞資こぜりあい
いつになく女の方が呑むという
燒酎は呑みなさんなと氣をつかい

紙手

香林

体操の代りに蒲團たたむなり

いつか「男女同權」といふ街頭錄音で、主人に蒲團を「たたませている」といふ家庭が大分あつて、こんなことをまで男女同權に結びつけられてはやり切れぬと不愉快でした。私の家庭でも妻が先に起きる関係上、しやくにさわりながら毎朝蒲團を「たたまされ」ていましたが、貴句を見て物は考へ方一つだと、それからは毎朝「体操」のつもりでヨイショ〳〵と愉快にふとんをたたんで居ります。

この句はなんでもないやうだが、処世上の心の持ち方に大きい暗示を與へている秀句だと存じます。先は御礼まで

香林さま　豆秋生

○

啓　拙句「体操の代りに蒲團たたむなり」をお賞めにあずかり恐縮します。

大兄はこの句を御覽になつてから、毎朝の蒲團をヨイショ〳〵の掛声も勇ましく愉快にたゝんでおられると承つて、私も一つべんに愉快になりました。この拙句を見逃がさず、それを直ちに、日常生活に取り入れられ、川柳しておられる雅兄の態度は、敬服の外ありません。

「川柳せよ」と、常に叫んでおられる先生も、頷ずかれることと存じます。作句の動機は平凡なのです。人間は五十才頃より「五十肩」（五十肩ともいふ）に見舞はれます。この病は、人を顎で使つている人々や、眼から上に手を揚げぬ職業の、おほ方が罹るのでありまして、所謂横着病と申すべきものでせう。それで私は、運動の一つとして、蒲團をあげることにしておりますので、それをそのまゝやつつけた……といふやうな訳でした。

勿論鉄アレイも振つて、大いに肘病撃退につとめています。

「川柳せよ」といふ路郎先生のお言葉は、私を川柳から一生離し得ぬものにしたと云えませふ。

貴句の「元旦だ一二三でとび起きん」などには遠く及びません。

先は御返事まで

豆秋様　香林生

川柳塔

俺も戦後派拜む心に遠ざかり　　堺市　中島生々庵

正直のこうべに税務署ふりむかず

医者として言へば姑達者すぎ

小走りに道頓堀を医者稼業

聽診器昔昔の傷にふれ　　長男大学　次男中学受験

親おろおろ受験の日がせまり

いとしの仔獅子蹴落すこゝち受験の日

受験場我が子乍らも逞ましく　　大阪市　武部香林

除夜の鐘借金とりも寢たかしら

有名になつて表札小さく書き　　床に臥す

咳き込めば起きてゐたのか灯が点り

失恋したのか洋裁屋を初め　　横浜市　福田山雨楼

子は多く主人は弱く今巴

図書館は休みのドアにつき当り

正月の水家の前流れ澄む　　東京郷　前山北海

ウキスキーに初対面から酔い潰れ

親日か排日にする單純さ

救恤品こんな贅沢させてたか

布哇　内藤草一郎

櫛の歯の折れにも見ゆる暮らし向

どう見てもあれじや貯らぬ呑つ振り

長病ひ二号を置うかと思ひ　　尼崎市　水谷鮎美

子沢山入試する子に――甸ふてる兒

焼酎だウキスキー瓶のなれの果　　平塚市　木村孤浪

暮の街宝くじやに陽がかげり

整理された事云ひ切れず箸をとり

お隣で今度はショール買ひました

お前にも白髪ふえたと仲のよさ　　大阪府　西尾栞

初旅の宿も日の出の軸をかけ

禁煙のどこが悪いと見舞はれる　　女中雇ふ

おかしさは奥さんと女中同じ名　　大牟田市　高田抱逸

極端な踊り課長は酔ふており

若草が延びて賣家の纏らず

ストのビラ貼られたまゝに初日の出

金づまりあせる初荷がもう届き

顛落の初夜にパン〳〵風邪をひき　　布哇　市岡曉舟

働ける倖せ朝のバスを待ち

一寸賞め盆栽一つ物にせり　　大阪市　市場沒食子

年上の女の情に引きづられ

退職金貰へぬまゝに年を越し

鳩時計事務所と共に身賣りされ

御立身公然と行く二号邸

訪問客の靴まで主婦として磨き　　名古屋市　吉田水車

言つ勝つていつそ淋しいたなごころ

すしやなら首になるよな飯を炊き

片方は煙草へのびるざる恭の手　　大阪市　須崎豆秋

アドバルンきさらぎの空どんよりと

アドバルン風邪ぐすりの名ぶら下り

務めとや朝から晩まで笛吹いて

ポカポカとぬくいので左り側歩るく

税金を苦にしておやじ臥ています　　大阪市　正本水客

かくし藝小女すこしも悪びれず

借り貸しがあつて兄弟そえんで居

夜の医者待つてたように起きて呉れ

灰皿の煙りに困る女事務

姙娠をしてもいゝわと少しすね

卵にも重心があり今更に

お役所に勤め故郷へ出張し

自由販賣政府施策のせいでなし

落ちついて恋の手袋とひの靴　　神戸市　竹内潮花

袖口で泣く日の師匠若う見る

看護婦の恋は眞冬の駅に立ち　　大阪市　北川春巣

たゞくれてもと避姙藥へ妻

鏡獅子のようにパーマをゆすり上げ

焼酎の話も分る僕になり

茶葉服着て技術屋の顔になり　　奈良縣　尾崎方正

退官開業の茶医へ

野に降りて給與ベースを寒う見る

脚を奪つてストに同情せよとかや　　正月神武天皇御陵参拜

敗戦五年参道に草が生え

これが嫁つて子を産むのかと怖しい
姫路市　夷　一笑

自殺する程の勇氣もなくて過ぎ
いざと言ふ時に皆んなの冷たすぎ
岡山縣　大森風來子

いつからか愛嬌忘れた女秘書
考らくの恋とか頭を水で分け
停年が近く二号に見離され
大阪市　橋本美奈子

女学生パスを見せると鈴がなり
のど自慢欠伸してるのを見つけ
精勤な人だと靴屋知つてゐる
良縁へ耳をかさない娘を案じ
水をやる花を敎へて出勤し
大阪市　水谷竹莊

千円紙幣持つておれない平社員
せとものかけらを拾ふ仲直り
廣島縣　弘津柳慶

パン〳〵の宿へライタ忘れて來
部屋を出て娘一人でお可笑しがり
母が叱るを父むつつりと聞いている
下関市　國弘半休門

いゝ仲になれて借家の見当らず
視察員やんわり指摘して去つた
素人の前で大工の手抜きなり
八代市　佐野卜占

原稿料は出せぬが何か書けと言ふ
信じたし然し無力な其の人を
大阪市　吉田斜水

一本を喫えば一本減る煙草
ペン先を替えて一日働かん

責任もなく午後の五時さようなら
電話事務恋のセリフをよく覚え
布施市　糸本醉月

やけくその餅をついたれ税務署へ
長屋にて英語敎授の額をつり
我家だけ國旗の立つたお元旦
岡山縣　山分淑郎

大根も干せばレビューの様に見え
未亡人ですとはつきり言つた悔
御無沙汰の失業同士駅を出る
父の代まではたゝいた煙草盆
高知市　月原宵明

役人に出張と言ふ打つ手あり
千円札何んにも買はず戻つて來
先生をやめる氣もなく嫁き遅れ
ポケットでハツピーまでも疲れてゐ
奈良縣　飯降白香

めでたさは荒疊へもさす初日
山口縣　長野井蛙

新聞を敷いて夜汽車に膝を抱き
喧嘩風父のない子と言はせまい
大阪市　竹田芦穂

痩腕と悟れば世間狭まからず
水藥減る如く死に近づくか
内幕は阿彌陀如來も存じなし
盆梅の自慢はつきづ湯はたぎり
貴い風呂お先へ御免ちと熱し
運送屋重いキロやら長いキロ
京都府　間嶋青丹子

南京豆の皮を散らしてよく弁舌り
金持つて行けば古本賣れていた

大阪市　上田春柳

混濁の世にすりきれた靴の底
金だらひガンガラガンと春の音
布施市　森下愛論

落籍されてからのお酒は弱くなり
私の日記貴方に惚れてゐた
貨物車を数へる春の日のうらら
大阪市　太田良子

その後は燒酎でする見積りし
結納の高を娘はいゝふらし
忙しいけれど日曜日は映画
尼崎市　靜岡忠八

法律を知らぬ抗議は恥をかき
実情を說けば思想を疑はれ
多数決悪法やたらつくるなり
別居させてさばけた親になつて居る
野心家と知らず二次会おごられる
岡山縣　直原七面山

恋人は貴男一人と言ひ切れず
二人へ何か言へよと秋の虫
寂びのある声が好きだと逃げられる
アブレゲールの恋が落ちてる夜の町
此の夫かつては吾れに膝まづき
日本が何うあらうとも恋樂し
処女裸身男ごちや〳〵寄りたかり
恋枯れて蜜柑のすじも取つて呉れ
何も彼も忘れ一人の人を恋ふ
未亡人鏡へ塵を溜めて生き
嫌だなあやもめ暮しに冬が來る
愚痴捨てゝ女は夜の花と咲き
反動で思はぬ妓抱いた夜

紫陽花のやうな女に抱きつかれ
愛を得た女は姉の様な氣で
岡山縣　黑田笑泉

反省をしてゐるとこえ誘いにき
断はられたを仲人もくやしがり
商品價値の様に二号を連れ歩き
宇部市　上林粗影

貴族趣味にあらず斜陽のしるこ屋だ
親子の爭を消す如く吹雪する
爪の垢をほじつていつまで働けるか
放つてをけ俺には養老院があるばかり
愛慾の文字にブツカル日々なりき
鳥取市　河村日滿子

梨里さんからの賀狀に
猫でありませんと賀狀ほゝゑまし
父ちやんは寢てる年始の誰か去に
長男の紐落しに
孝行をしてやとはずむ紐落し
一日一日出勤の判ベタと押す
兵庫縣　田代尋四

見直せば彼女の鼻が曲んでた
供出の火鉢漸やく買戻し
兵庫縣　家沢薺花

トラックでどならせたのが当選し
プレゼント金にあかしてきらわれて
さる程にノーベル賞も忘れかけ
自衛權まだ竹槍を出したが
肥を施る匂ひもまぜて春が來た
滋賀縣　黄瀨美秋

寢ころんでする思案なら知れており
料亭の灯だけ残して寢靜まる
膝まくらそばに枕のあるものを
ボストまで行くにお白粉叩きつけ
マッチするだけにチップをせしめられ

花嫁の悲恋に泣いた顔でなし
バイブルを持ち知性美のよせつけず
熊本縣　西口如川

見合席では取つときの声を出し
煙突の高さ辭んだ瞳が仰ぎ
其椅子は大公望を待つて居た
岡山縣　藤本滿年

本当の美人と記事はダメを押し
猫きよとん挨拶もせず帰つとり
風邪ひいて河合武雄のような声
おとなしい顔している時に使い込み
感冒藥はこりのまゝで賣れてゆき
値下りはわが家の門にまだ入らず
停電を詫びず値上げを押しつける
德島縣　姫田夕鐘

心中とまでは行かねど年の暮
飲むことが無駄ばつかりとは思はれず
岡山縣　福島鉄兒

本当でつかと娘氣が動き
投賣を値切ればあんた去になはれ
わたいかて女だつせと挑んで來
岡山縣　直原湖月

あの人に会ふと思へば雪をいとわず
此の帶を米にしようかと思案する
岡山縣　黑田久米女

人柄をほめて月給にはふれず
長男が聞きたい父の貯金高
子に賈ぐ話で樂し老夫婦
岡山縣　藤本茶々

折れておく術を知らず妻淋し
余所よりは安くしますとお百姓
北風に新聞配りが押されて來
雪もよいハンストさつさと引上げる
大阪市　塩浜一路

正月の雨へ老いの二人の茶
味噌汁の味が家庭を持てと言う
大阪市　谷内一草

手袋をぬぐ間も惜しい久し振り
初雪の嬉しさ犬と共に駈け
大阪市　福本翮骨

暫くは聽き手となつた口の飴
幻燈へ幼き夢よ子等と居る
池田市　太田木声

わが生活むかし昔の愚痴に暮れ
大阪市　松崎五馬

ぬけがけと想つた年始へあいつも來
三面で良いパパボスにされてゐる
愛すればこそ会う度に出る皮肉
○
松山市　前田伍健

猫言はく俺に似た絵のカレンダー
氣短かの癖に諧曲などをやり
外交の時にうなぎの如くぬけ
千円札いづれ縁なき財布です
舞台裏覗かぬ方がよござんす
大阪市　橋本綠雨

はらだたしさは人眞似が出來ぬなり
霜の道踏んで仕事の面白さ
靜岡縣　冨士野鞍馬

家元が立つと滿場しんとする
明朗な夜逃げもあつて金詰り

胃酸過多
胃痛・胃潰瘍に…
ノルモザン錠
45錠入
大阪・武田藥品工業株式會社

雑筆 春秋

若返へり異変

吉田水車

昨年の事である。中京日抜きの場所栄町交叉点の近くで○○製菓会社創立記念と称し、文字通り山程のお菓子日〳〵ミルクキャラメル、チョコレート、板チョコ、ビーナッツ入りチョコ、大型ビスケット、ヌガー、ボンボン等々甘党ならずともすいえん万丈と言うしろ物が、百円也で飛ぶように賣れてそれが一ケ月程も続いた。多少頭のしつかりした御仁ならこんなものにひつかゝらないだろうが、あはれむべき善男善女達が先きを争つて買つた。勿論其内の何割かはサクラであつた。見る見る内に百円札が石油箱一ッぱいになる。こんな事をおそらくは一日の内数回以上もやるのだから、その額たるや如何にお札の價値がなくとも相当なものになる。どうも臭いと思うてゐたら果してそれがサギ罪として検挙された事を新聞で見たが、新春早々から同じ場所で同じ構想のもとに、やはり又同じ製菓会社の名でやり出したが、今度は○○製菓会社三周年記念大安賣りと拡声機が吠えてゐた。今年から満才となつたが去年創立した会社が今年で三周年とは正に若返へり異変と言へよう。

サクラ又客の顔色見ては買い　水車
客が増えサクラはやをら部署につき　同

愛される川柳

あまり感心しない題目で恐縮、しかし眞実昨今川柳は愛されてゐる。ラヂオに随筆に名士の座談や其他の会合放談等々にすいぶんと川柳が使はれてゐるし、中でも落語、講談に出てくる川柳にはかへつてウンザリする。そこで考えさせられる事は、果してこれでいゝのかと言う事である。勿論言論の自由は斯うした発表を亳も防げるものではないし、又それが川柳を論ずる事が目的でない以上、引例された川柳の適否についてむきになる必要もないのであるが、我々川柳作家にとつて耐え難い事は、切角愛され宣傳される之れ等川柳が、一般に対し誤つた認識を與えはしないかと言う点である。それでなくとも専門家（作家）以外の人のみる川柳觀と言うものは、まだ〳〵おもしろいと言う事よりあまり遠く出てないから、やはり上記の如き愛用川柳はおもしろ味を助けるに役立つ以外あまり効果はないのである。おもしろいと言う事も一般の言うそれと、我々の感じるものとは全く異なるのであつて、それは同じ笑いでも、涙の出る笑いと、たゞゲラゲラとその場限りの興趣に終るものとの差と似てゐる。

上記の愛用乃至は引例川柳があく迄宣傳主義を出ないものである以上、それ自体には川柳の正しい認識に及ぼす影響につき責任もなければ義務もない訳である。たゞ話のつなぎに川柳がかくも旺んに使はれる事は、よろこんでいゝのかかなしんでよいのかと言う事を考えて見度思うだけである。

自由表現

安川久留美

私が小学校へ通うた時、その朝雨風の悪天候であると、祖母がよく「雨、風、糞尿（ばり）婆女座頭だ！」といつた。之れは三ッの対照を表した昔からの俗言であらうが、イバリをバリ、ザトウをザツトと訛つた点に妙味があつた。つまり調子で斯くいふ。

辞典では婆女は「三味を弾き、銭を貰い歩く女」であり、座頭は文字の如く「昔の琵琶法師の首座」とある。その調子の中のイバリのいとザツトのつが川柳の自由律を学ぶにも初心者の参考とはなるまいか。例へば路郎氏の旧作

まつたなしのふにさされたる
犬養毅

の十八字自由律は既成句より一字多くともその調子乱るることなく一行的の作品となつている。殊更に文字を多く自由々々と叫ぶ輩に、自づとまろび出る表現を究めてほしいと、いつも思つている。

療養所の川柳

大鶴喜由

療養所に川柳会を初めてから私の心を喜ばせてくれた事は、患者が川柳を理解された事である。大抵の人は比較的短い期間に興味が湧いて来ないと、自分等はそんな柄ではないとあきらめてしまうやうである。

療養所ではすゝめられて退窟しのぎにやる場合が多い。少なくとも二ケ月目にはお上手抜きの一点句が一つでも抜けるやう指導したいものだと思つてゐる。

先輩は私等に多く作れ、多く読め、多く句会に出よと聞かされた。然しこれでは全しとは言へぬと思う。句会の席では入選句の読みつばなしと、川柳の発生や柳樽の句評に時間を潰たし、今作らんとする人には縁の遠いものばかりであつた。近頃「川柳雑誌」では誌上の句評及び句会席上での句評を試みて居られるが、初心者と共に双手を上げて歓迎する。

私の川柳指導のあり方としてはその病を知り患者の心理を把握し、表面でなく人間味が言葉に憑度に句の内容に現はれるやう、そして力めて明るい句を望むこと、又選に際しては最近の秀れた句、新しい句をとり上げてその良い所を分析して教えこむこと、その時代の句を作ること等を主眼としてゐる。例へば二年前の句に

腹の減る遊び私は見ています　没食子

喰うことばかり書いてくる手紙　美奈子

等があるが食糧事情がよくなつて来ると

汽車賃を言うて農家へ近づかず　路郎

諧なんかなどと敬遠されはじめ　同

等に変つて来る。今二年前のこの句に万一出逢つたとしたら没になるかも知れぬ。然し「喰うことば

近作柳樽

棺桶へ入れる着物の柄を選り　和歌山宏方
頼りなく揺れて芒は日を送り　同
花咲いていても雑草引抜かれ　同
診察を待つ間も女何か編み　同
税務署が薄氣味悪く灯がともり　同
要求をされると女もうさとり　同
ホ句作れと梅の花蕊のとう　同
仕事せぬ順に大きな机にゐ　大阪市朝夫
捨てられた意地が濃くした紅なのよ　同
背の子が引いた五等であきらめる　同
上役ときいてマスクを外す妻　同
服買うて靴の汚さ手の太さ　同
妻といふ面会新聞包み持ち　同
少しづゝ還へり再婚いひ出せず　同
お姿の口はないかと心識な　廣島縣芳泉
首を抱く露はな腕の蛇に似て　同
捨てられてからの女の行狀記　同
結局は婿と一しよに出て了ひ　同
札束を女一度はたゝきつけ　同
たそがるゝ河原に牛の忘れられ　同
日帰りの逐に弁当食いはぐれ　愛媛縣曉童
洋装のやゝあつてゴールデンバット出し　同
銘仙の膝から娘らしくなり　同
君のお父さんわと飲みながら御説教　同
塗りかへてあぶない本社持ち直し　同
雪どけのぬかるみに似た物價安　同
何云はれても喰べたが得と言ふ老婆　東京都東夢
口ほどになく役人は酔ひ潰れ　同
三人の子持が処女で通る夜　同
金百円のコーヒー飲んだ話をし　同
特急に似た素早さでスリは逃げ　同
銀座通り住むに家なき人もおり　同
雛の目にダイヤもつゝくものに見え　貝塚市千舟
終点で千円札の剰銭が出來　同
附添と噂にのぼる程に癒え　同
雑魚寝して髪結賃も拂はされ　同
審判所もとの夫婦になつて出る　同
追放の父も書だけは世に遺し　八代市斗四翁
失業保險さあぎりぎりの月が來た　同
度が過ぎた化粧一家を暗くする　同
無心狀豪華な用紙使つてる　同
抑留はある日の白髪ふと見つけ　同
根が生えた様に催促座り込み　高槻市丁路
風薫る里へジープが迷い込み　同
プライドを捨てゝ自活の屋台店　同
何思ひけん朝夕妻は経を読み　同
盗人の片棒かつぐ氣の弱さ　同
機関手の停車時間を流行歌　岡山市苑女
炉燵でも出來る内職すゝめられ　同
渇水期小使さんの役が増え　同
鼠がひく様に再婚荷を運び　同
倦怠期だよと心配してくれず　貝塚市庸司
父は過去子は將來を語る酒　同
ボス何処へ行くのか袴着て出かけ　同
プレゼントしたネクタイで來いと言ふ　同
巡査來て話題変つた焚火の輪　岡山縣牛歩
見込み通り穫れてりや濁酒も造れたに　同
無印の傘を二号は選つて貸し　同
彫刻家背中の方は樂に彫り　同
ニュールック（振り返つてるミスポリス　貝塚市幸司
ボーイフレンドと母信じてたに娘は姙娠み　同
かりの句には大食家とか失業とかを前書きするか、句の中に盛られねばならぬ次に入選句の説いを分解してほめる。そして沒句にした理由、どうすれば更生出來るかなど、大体以上のやうな方法で指導してゐる。

さて一番困るのは病者の先入主で作られることである。闘病等の題の下に作る場合以外は健康者が基準であるから、十七字の中に病者である片鱗を表されねばならぬ。例へば手の細さ、命ある喜び、便所まで行ける嬉しさ吐く呼吸熱し、鈴振れば來る母、七度一分等又はつきり、試歩、安静、患者食療闘等入れねばならぬ。

三百六十五夜夢も病と闘いて　喜由
美しい見舞のあとで二分上り　同
空白の日記は死線越えた頃　登志坊
全快の秘訣を知つた三猿図　同
お見舞の花が春よと告げてくれ　キヨ子
退院日帽子の埃妻拂い　高明
お薬の目盛違える床上日　益坊
闘病の甲斐あり臍が上を向き　六々
赤リボン髪に飾つて乙女病み　茂樹
長患ひ義理の手紙も來なくなり　虚舟
病みこけて母の情が身にしみる　一夫

川柳料理暦

——春の巻——

水谷竹荘

蕗ほど乳母の里から挑の花
（古川柳）

桃は割合に滋養分に富んでおりますから、生で食べまして美味なばかりでなく、常習便秘のあります人が用ひますと特効があります。

それに消化もよろしいから、ドッサリでない限りは病人、小児も用ゐまして差つかへはありません。薬としての桃のきゝめは、桃仁（核の中にある仁）を漢方では婦人病によく用ゐましたもので、月経不順、産後などには芍薬などといつしよに用ゐてをります

が現に有名な婦人薬の二三のものにはかうした桃仁を含んでをります。又挑葉を産湯の中に入れれば、將來その兒は瘡を発することなし、汗瘡には桃の葉湯にて洗うとなほります。

白魚の目は楊貴妃の手のほくろ
（古川柳）

白魚料理も沢山ありますが、その中から、食通の喜こびそうな、意氣な白魚料理の作り方をおしらせします。

白魚を洗ひ、薄く塩をふり、暫

大晦日せめて髭なと剃つたろか　同
シヤツターを切れはまたぞろガムを噛み　同
人様のもの縫ふための附錄買ふ　大阪市光丘
たゝきつける筈の紙幣束いたいて　同
鏡台があれば退屈せぬ女　同
里のよさは夫大きな声もせず　同
あのさびも慾しゝ若さも持つてたし　大阪市春雄
栄轉のなんのかんのと追ひ出され　同
百円の吉兆で福が來るのなら　同
オーバーの値だけを聞いた歳の市　同
半分も吸はずに捨てる儲けぶり　廣島縣愛鳩
長女もう背伸びで棚の物がとれ　同
未亡人はかない意地を張りつゞけ　同
もう里もきいてくれない金詰り　同
女女嫉妬のまなこで笑ひ合い　滋賀縣文子
ライバルと知つて話がとぎれがち　同
あんな娘と思つてゐたが恋敵　同
強く生きる女は冷たいものに見え　同
焼けさへしなかつたらと又愚痴り　岡山縣十九平
まゝ事の様な世帶も金詰り　同
基本的人権などゝおかしくて　同
税吏とは知らず儲けたホラを吹き　同
息子からチツクの減りをなじられる　大阪市敬
八卦見に訊く会をする清交社　同
墓同志話してさうな月明り　同
政府への希望マイクは聞いただけ　大牟田風浪
多勢には課長敬語で話すなり　同
株主になつてもストはせにやならぬ　同
もぢもぢと父も度胸がないのなり　小松市茶佛
議会とはあさましまもの眼を閉じる　同
千円札の話しいしい不義理する　同
先客があつてサンシー通り越し　大牟田一葉
家出した子がありサーカス見逃さず　同
お土産の夫婦箸とはこそばゆし　同
暖炉談議これで勤務になるだろか　倉敷市千代男
年ズレて妻は白髪が氣にかゝり　同
納得をしようとすまいと声明書　同
裸ショウ見るにじやまなり二人の子　今治市醉歩
常会の隅で淋しく粉煙草　同
雨続き麦の心配ばかりする　同
着ぶくれて百姓春待つ姿なり　長野縣柳兒
産制が余儀なき日本のけつまづき　同
肩書の名刺を追放捨て惜しみ　同
親の苦も少しわかつた二十一　鳥取縣夕路
大臣の視察選挙も近くなり　同
共学のいつかおしやれになつて來る　同
民主々義嫁に呉れろとぢかに云え　日田市独活
見合とも知らでざる碁に打興じ　同
煙草吸ふ手錠と巡査友のやう　同
二号又隣へ愚痴を捨に來る　高知市一徹郎
日当りで縫ふ女房に恙なし　同
金詰り女房まだ〳〵意識せず　同
軽快な音で故障車通過する　大阪府きはち
スクーターダブルボタンで風をきる　同
金語楼恋にやつれて笑はせる　同
出産へしばし優しい夫なり　岡山縣幻火
人前もあろうに女号泣し　同
かけがへの無い写眞まで掏りとられ　同
街錄に甲論乙駁老いを知り　横浜市智水
忙中の閑コーヒーの味となり　同
仮普請あとは儲けてからの事　同
会へばすぐ明日行くと言ふ大工さん　高知市桂夢
金も無いに強盗の來た夢をみる　同
零対零電波の逃げた九回裏　同
宝籤亦出たナーとだけ想ひ　金沢市陽々
別れるがつらいと泣いて行つたきり　同
臨終の父はアロハが氣にかゝり　同

〳〵置き、十五六尾、或は二十尾程攝へて、三葉の五分切と舟形皿にていさいよく盛て、蒸にかけ、蒸せたならば玉子を割入れて、月に見立てゝ再度蒸にかけ玉子の半蒸せの時におろして、海葛の汁を仕立てゝ味をつけてかけ、青海苔の細末を玉子の廻りにおいて、露生姜を二三滴おとして出します。これを白魚の観月蒸と言ふ。

春寒し山の蕨もふところ手　（古川柳）

山や野に青い手を出す初蕨　（古川柳）

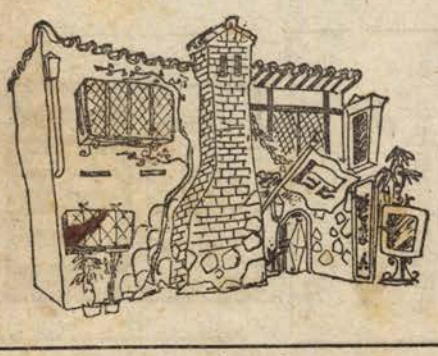
蕨は滋養分はありませんが、加里塩に富んでをり、それから澱粉をふんだんに含んでをりますので、これから澱粉つまり蕨粉を製します。

下戸が箸取ると嵐の櫻鯛　（古川柳）

花の散るやうに鱗引く櫻鯛　（古川柳）

鯛は我國では日常の総菜用としては勿論のこと、凡そ祝ひ事等の場合には欠くべからざるものとして貴ばれてゐますが、外國では殆んどかえりみられてゐないのは不思議な様にも思はれてゐます。さて味から云ひますと、普通魚の美味な時季と云へば、多く産卵期の脂の乗つたときであり、鯛もどちらかと云ふと産卵期の春先、櫻鯛と称して体色の一入艶麗さを増した時期が一番美味なのでありますが、四季を通じて味を落さず鯛にはシユンなしと云ふ人もあり、食用にする場合勿論色々の料理法もあり製品も出來てはゐますが、愉快なのは煮付などにした場合、骨までしやぶつて食う所に、鯛としての食味の魅力があると思ひます。魚によると頭なんかぶつ切つてすてゝしまうものさへあるが、鯛に於ては、お祝ひの意味はともかく、いわゆる尾頭付でなければなりません。頭では先つ頭だ、前蓋骨をそつと起こして、そこに薄いがこつてりと締つた肉の一片のあることをゆめ〳〵忘れてはなりません。ちよつぴりとした所ではあるけれど、たまらない甘さを感

粋なふらんす式
ホルモン料理
北極星直営
ゐなん
南区戎橋　北極星裏通



夢を捨て旅の一座に名を連ね　高知市栄　同
ニュフェース悲しい唄が好きといふ　同
雑音の中に金魚も生きてゐる　同
牛肉屋選挙戦ほど呼びかける　岡山市忠　美
強いこと云つて老人涙ぐみ　同
労組員にらまれぬ様発言し　同
税務官マダムに惚れられたと思ひ　東京都万　年
競輪で馬鹿奴怪我だけして戻り　同
鐘一つあたし器量が悪いから　佐賀縣えいを　同
追放の好きパパとなりハスとなり　同
貸倒れ懐かしく見る古帳簿　同
終列車妻は肩をばすぼめて來　同
彫刻へやつれた夫の輝く眼　岡山縣秀　鶴
失言も責任軽き席に居り　同
雨漏の位置が変つた風模様　今治市映　月

四男出生の一日

腕白が又も出來たと氣が強し　同
末子のおませが姉を恐らせる　愛媛縣孤　峰
頬冠り生きねばならぬ麦を踏む　同
最低の予算でやはりのむ話　愛媛縣旭　童
酒の魔術はこんな愉快な父にする　同
親切な友アベックの供もする　大阪市志　津
親切な嫁は次男の嫁であり　同
ぬか味噌を女代議士もて余し　中豊市直　郎
慰謝料の出せる男へ嫁に行き　同
蓆の目足に残して食事すむ　富山縣三　峯
天勝にだまされてゐる一人です　同
子に歩調合わす散歩は公休日　吹田市南　舟
子を叱り吾も幼き日を想ふ　同
妻をかばう氣持も五十過ぎてから　愛知縣吐　平
病人の食べるでもなき見舞品　同
停電へ念佛かわりなく聞え　岡山縣朗　笑
子を返せ返せと汽車に怒鳴つたが　同
ニュールック何処で稼いでゐるのやら　大阪府みのる

無心する便りのほかは筆不精　同
太つちよがこぼさぬよう黄い風呂　新潟縣不　味
福引のマッチマッチに嘲けられ　同
休業は税のためとは書いてなし　布施市柏　葉
贈られた中味をすばり云つてのけ　同
新設のポストへ入れて不安がり　三原市正　一
行きづりの墓へ心の花捧ぐ　同

孝母一月廿九日大怪我をする

裂傷をブツ〳〵と縫ふ元軍医　大阪市葉　光
銀行の小使ひ紙幣の重さ知る　同
王將が攻められたまゝある控室　三重縣紅　山
冒険な氣にもなれずに鶏を飼ひ　同
恋をする身は猫よりも弱かりき　東京都高　志
年なんていゝちやないぞと手を握り　同
名産がほこりだらけで並ぶなり　愛知縣北　雷
割勘だ御座付きなんかやめてくれ　同
一本の草敢然として伸びてゐる布　哇東田楼
空魚籃を覗いて釣師に叱られる　同
今日の嘘あしたの嘘を用意する　熊本市無　六
履歴書一枚先づ手習をする構へ　同
旅先の年賀風景も書き添へる　石川縣光　郎
誰が貼るのか宿直室のプロマイド　同
アトリエのポーズきわどく隠しゐる　大阪市草　右
清貧が何思ふたか宵戎　同
書初めの墨つけたまゝ餅を喰べ　大阪市葉栄子
双六の賞品蜜柑が先づ積まれ　同
エロダンス法ぎり〳〵に踊りぬき　石川縣夢　晴
雨の夜この静かさへ誰呼ぼう　同
來訪に朝寝の帯の周章てやう　岡山縣娯句樂

末弟四十九日忌に因み

家の者だけで在りし子語り合ひ　同
床上げは散髪屋までの散歩なり　岡山縣一　路
賣り惜みした大根にとうが立ち　同

する。それから眼球です。淡々としてとける様なはかなさの中に甘い汁を舌頭に感ずる。その眼球の味を忘れては鯛の鯛たる價値が無いと云つてもいゝ程独特な味です。次に頭骨をほぐして行くと思ひがけない所に骨の間に甘美な肉の小片を見出す。それをしやぶる様にして鯛の頭に食つく時、格好なんか云つて居れない魅惑を持つて居ります。こうして骨をほぐして行くと、鯛の鯛とか大竜といつた面白い形の骨を見出すのも一興でせう。

蛤は欠伸のうちに家をたて　（古川柳）

蛤も芽出度い時によく使はれます。蛤、むし蛤、味噌汁、佃煮等等色々料理法もありますが、めづらしい蛤飯の焚き方を御しらせしませう。蛤の剝肉を立塩（塩水）でよく洗ひ、次に清水をかけて後水氣を去り、米一升の剝肉一升の割合で火にかけた釜の中にある米の上に入れ、醤油一合と水一升で炊くのであります。炊き上つて櫃にうつすとき、海苔をもんで振りかけて喰べますと旨しいです。

但し水加減は普通の炊方では米一升に水一升二合を要しますが、之は減水して一升とします。

筍もまたやはらかで歯につかず　（古川柳）

珍客へ自慢の藪を輪切にし　（古川柳）

先つ筍の茹で方から申上げます。皮付のまゝ糠を入れて約四五十分間、茹でゝ冷水に取り皮をむき冷える迄アク抜をして置きます。（糠のない時は唐辛子五六本を入れて茹でるとよろしいです）筍料理も沢山あります。

筍煮、そぼろ煮、胡麻酢あへ、木の芽和へ、若竹等々その中から筍の代表的料理としてよく知られてゐる筍の木の芽和への造り方を御しらせ致しません。

材料は筍二百五十匁、白味噌四十匁、砂糖大匙一杯、青黄食用粉少量木ノ芽少量です。擂鉢に木ノ芽のすりきを取り葉だけを入れてよく擂り、白味噌を入れて又よく擂り砂糖を入れ、青と黄の食用色粉を水でとき緑色に合せて加へます。これで木ノ芽味噌が出來ます。自然の色にするには色粉をやめて浚藻（ホーレンソウ）草の葉をよく擂潰して水をタップリ加へ布巾で漉すと青い水が沢山とれますから、それを鍋に入れて静かに煮立てますと青い塊か浮き上ります。それを布巾に受けて冷水をかけて洒らしたものを青寄せと申します。これを味噌に混ぜるか又は、三ツ葉、浚藻草の葉を茹でゝそのまゝ水に冷してから刻んで擂潰してすぐ味噌に混ぜても、美しい緑色になります。

筍は縦を横に切る様適宜に切

にきびとり美顔水
緑谷眼天堂

ビヤホール
みどり
上六交叉点角西北

縁切つて見たがダモイが氣にかゝり　滋賀縣観月
病氣ですと女和服でしをらしく　同
針仕事又保險屋に邪魔をされ　尼崎市ちか子
本妻のほうがきれいでありながら　同
遠足へまゝ母らしい氣をつかい　岡山縣吉備平
絵の様な顔それだけでもの足らず　同
御安心下されませと子の便り　岡山縣北路
恋愛もようせず縁談まちつゞけ　同
啄木の好きな乙女が自殺した　島根縣米市
子の唄に父は音痴で合唱し　同
造作なく新生命を妻孕み布　哇純香
新社長挨拶だけは堂に入り　同
一杯の醉に浮世の灯がともり　大阪市喘六
燒跡のねぐらへネオン浮かび來る　同
一晩の故郷七日目ごとの妻　奈良市笛生
夕刊をまるめてサラリーマン帰る　同

病舎の一日

看護婦が退けて病舎は夜のもの　富山縣壽郎
肋骨が洗濯板に似てわびし　同
産褥の名残り天井の守り札　鳥取市芳道
若いときは働いたやう叱りつけ　同
健一人残して政界晴れわたり　滋賀縣木人
規約だけ造つて金をどないしよう　同
ぼんやりしてると裕福だと見られ　兵庫縣夏六
頼りない僕へ就職頼みに來　同
督促をすれば千円札を出し　鹿兒島華水
胸の内花に托して持つて來る　貝塚市勝
ローマン派だけどやっぱり腹も減り　大阪市修子
俺の若い時はと言へば子が笑い　高知市元馬
縁談の話も定まる夜の二時　滋賀縣季贊
春が來たのに春が來たのに金づまり　東京都勝彦

呑み好きの友ばかり來た三ケ日　大阪市桃村
裏返す工面がついた古い服　大阪市惠風
買わぬ品安い〳〵と見て歩き　岡山縣治夫
見知らない人が立退言うてくる　高槻市白溪子
金の話それが趣味なる人と坐し　山形縣水雨
溜息をついてういんどから離れ　香川縣朝兒
婦人部長の借家はくじも買はされる　秋田縣陽治
平凡な人は人等で笑ひあひ　石川縣夏波
見解の相違だ議論やめとこう　福岡縣里木
いつも來る紙芝居にも好き嫌ひ　岡山縣鴻峯
物慾に走る女を咎め得ず　大阪市弧舟
口を開けば金、金、金、の未亡人　青森縣山月
長話結局借りたをことわる氣　香川縣迷観子
空魚籃へボン〳〵船の波が寄せ　大阪市二桂
ほれてゐる男連つ子びいきなり　東京都與志雄
立小便二人竝べば口を開き　兵庫縣指月
投げ賣りのなければないで済ます品　岡山縣春枝
逢うて別れて北風と共に去り　滋賀縣斗志
洗濯もせずに子供の抗議する　滋賀縣明
投げ賣りの買はない客をもてあまし　廣島縣柳露
税は義務と訓すかげでは不足言ひ　滋賀縣利枝
橋筋で逢へば氣取つてものを言ひ　大阪市優子
公約の先に違反がばれ出して　滋賀縣郁夫
戰後派の娘同志で伊達に飲み　神戸市古竹

スキーに行く

写眞では滑れそうだとひやかされ　滋賀縣喜久江
ショウウヰンドの中は春風春の色　東京都清美

縣廳世話課長の叔父を訪れて

世話課長泣かれ涙の例をいゝ　岡山縣半三郎

り、下煮と申して出汁の中に塩少少を入れ、薄味をつけて置いて、冷やしてから木ノ芽味噌であへます。

好みによつて筍だけでなく烏賊鮹、あわび、老海等を取合せますと、一層風味がよくなります。

春の料理はまた〳〵沢山ありますが、これくらいにして、今度は夏へうつりたいと思ひますが、その間に、料理に関した面白い句を拾つて見ませう。

手料理もじまん自炊の友と飲む　（空茶）
米櫃の底が財布が欠伸する　（了洋）
つまされた話わさびは知らぬなり　（民郎）
お刺身に一人だけなら足る醤油　（可香）
手作りの豆に季節の味覚知る　（秀夫）
いつまでも肉と葱との仲であれ　（路郎）

＝社の黒板＝

▼一人が一人の読者をお世話下さい。

影の声・二人でも三人でも…

▼購読を休んでいられる方は復活して下さい。

影の声・ハバ〳〵。

▼四月例會＝一日（土）午後六時―九時。大阪市南区鰻谷仲之町六八（三休塔南詰）大室女化会館。兼題：パトロン「定期券」「歓員」各三句・席題当日発表・柳話句評等。ベストテン第一席に不朽洞会賞授與。会費五〇円

▼櫻の會（本社主催）予告ボカ〳〵あたたかくなつたので四月十六日（日）に生駒吟行を開催。参加希望の方は、川雀雀波連絡所（電話南㊱一二一四・一二一五）へ申込まれたい。なほ当日は上六駅南、上六小劇場前午前十時）に又は生駒駅前午前十一時）に参集されたい。弁当持参

麻生路郎著　水武書房版

川柳を研究したい人にも指導する人にも好適の書

本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものであ。「川柳とはどんなものか」から説き起して敢むるところ三十七講、平明で親切で、初心者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出來る。多年川柳してゐる人たちにとつても又好参考書である。敢て一聴を薦む。

B6版　二一二頁　定價　一〇〇円　送費　金四二円

取次御注文は　大阪市住吉区番場代西五丁目二五番地　振替口座大阪七五〇五〇　川柳雑誌社

句評
川柳街(下)

東京横浜屋古名
宮田福吉
田山田田
不雨水米
二楼車雄
大牟田山岡
田高浜
田抱逸

戻つて來るかも知れへんと嫁に行き　（孤舟）

水車＝これが自由のはき違いでないことを祈るものである大阪弁がよく利いている、この場合標準語ではおもしろくない。斯うした行き方は案外樂なようでも作者は相当苦しんだ事は字余りーそれも僅かに一字ではあるが耳障りにならぬ程度にーをうまくこなした点である。從來の観念でなくとも嫁に行く事は勿論人生の最大最重の事柄である。それを「戻つて來るかも知れぬ」と放言させたのは作者の見付けであろう。

山雨樓＝むしろ八、五、五の大胆な表現と見るが、これはあくまで定型の格調を外したものではない。この句の思想内容は古いように見えて、却つて新しい世相の結婚生態に触れていると思う。その意味でこの句は一つの問題を提出しているとも云える。良妻賢母的な女性抑圧の思想から律すれば聊か軽薄な結婚態度を指摘しているが、婦人の開放的、自主的な貞操観念からすれば新しい時流えの批判と見られるであろう。「戻る」「來る」「行き」と言葉の掛調ではあるが、遊戯本位でないから無論狂句ではない。大阪弁がこの場合効果的であると見ることには同感である。

久米雄＝平凡な句調のなかに方言を適当に取入れている手法は一應うなづける。昔もこんな型も少しは居たろうが特に戦後派的なねらいが表われている。まあ〳〵無難の句であろう。

抱逸＝簡戯の調停をやつて屢屢こんな女性の氣持に接したことがある。どうも終戦後の女性はとにかく食うためか、かゝる軽薄な氣持でよくも結婚する人があると見える。こんな氣持ならむしろ女性開放的見地から断然断るべきと思う。併しこれは句評であつて作者へ云々言うのではない。

不二＝とても仲のよかつた二人がいよいよ結婚だ。はたで見る目も羨ましい。「いつまでもどんなに幸福なことだろう」とお嫁さんに呼びかければ、その点は自信たつぷりのお嫁さんは嬉しさのため、にべもなく「うちなど一週間もすれば戻つて來るかも知れへんわ」とほゝ笑んだ情景に取りたかつたのは僕だけの無理な注文でしようか。あつさりとこの句を軽薄な結婚観の句とのみ見過すことは残念なような氣がする。クラスメートしかも親友のA子との会話として、この句を受取るとき、近代娘は多分にユーモアを解している筈である。「戻つて來るかも知れへん」は余りにも戻つて來ないことに、自信のある歓喜に満ちた言葉であることよ、と云いたいものである。又結婚はそうなくてはならぬ。

亂脈の世に俺も居るよろよろと　（おさむ）

水車＝これは自己反省である。七五五型としたのはやむを得ないとして、上七が甚だ生硬で、もう少し具体化してほしかつた。作者はどちらかと云えば、感覚の句を得意とされるようであるが、総じて感覚調と説明調とでは表現の如何では感覚描写がくどくどした説明調より優れる場合が多い。説明もくどいと却つて單調をさえ感じさすものである。

山雨樓＝作者の云わんとしているところは容易に察せられるのであるが、考え方が甘く観念的な見方から脱けていない。と云うのもつまりは自己批判の切り込み方が、足りぬのではないかと思う。座五の表現もこの場合説明的であり、句の具象化が足りぬのは遺憾である。

久米雄＝よろよろとを俺も居るの上に持つて來て見たが、別に意味は変らない。下に持つて來たのは強める氣持だろうが、何れにせよ概念的でなく、もつと堀り下げて考えてはどうか。

抱逸＝山雨楼氏と同感。

不二＝主観の句としては、乱脈とよろよろで、これでもかこれでもかの暗い句である。同志が余りに多過ぎるだけに乱脈の世、そしてよろよろの中に明るい方向を求めたいものである。せめて句にだけでもそれを見出して貰いたい。

山雨樓＝不二氏が明るい句を求められたのは、その人柄に因ることだが、作者の眞実をまげる注文はどうかと思う。暗い句でも暗さに徹し人間探求に徹するならば、藝術味豊かな川柳となるのである。われわれは何よりも優れた川柳を求める。明暗硬軟は問うところではないのだ。

戀をしませう戀をしませうと目が溺み　（七面山）

久米雄＝最近めき〳〵作り出した七面山氏の句が、どの月のものを見ても肉体文学的なのが竝んでいる。川雑の持つ一異彩だと思う。アプレゲール派と云つて云えないこともないが、確かに面白い行き方である。この句特に取り立てて云う程のことはないのだがそうした意味で提出して見た。

不二＝恋愛至上主義、若き情熱をいつまでも持ち続ける積極的な壮年、否老いらくの恋を作句することによつて、あまりにも息苦しい現実の世界への一清涼剤としたあたり、まことに川雑の一異彩であると敬服して居ります。柳路氏亡きあとの今日、その意味で心強いものがあります。豆秋調鮎美調、そしてかほる調、今また七面山調を得た事は最近喜びの一つであります。

抱逸＝いい年でも肉体文学が

かなり好きな抱逸、いつも七面山氏の句に特別の興味をもち何度も繰返しているが仲々面白い。われわれはいつも常に新しい川柳を創造すべく努力するものである。この新しいという言葉は必ずしも素材の新しさを指示するものではなく、現代の時代性の表現をモットーとしている。この意味において肉体文学を推賞する。

水車＝するどい感覚でエロ調子への一線を画した点、川柳塔の作品としてむべなる哉と言えよう。アプレゲールと評するのは如何にも時代迎合の話で、斯うした行き方は、作者を以て嚆矢とする訳ではない。花柳吟、情趣調の作家はずいぶんあつたが、ただ此作者によつて時代感覚をハツキリ示されたのが、何か呼びさまされた氣になるのである。危な氣がない肉体調ならたしかにいただける。そこでこの「恋をしませう」の句だが疊語法によつて緊迫感が十分出ているし「目が搦み」の表現まことに妙である。

山雨樓＝句主が異色ある作家であることは諸兄がのべられた通りである。谷崎潤一郎もその昔肉体文学（その頃は遊蕩文学と非難された）で新しい感覚を示したものであつた。由来川雑からは逐次特色のある作家が表われており、七面山氏の今後が期待されるのである。ところでこの句は路郎先生の「恋の艮あの眼だらうか眼だらうか」と同巧異曲の作品であるが、先生の句に及ばぬこと遠いものがある。敍法の含蓄が足りないからだ。一人の女を知り盡したものは千人の女を知つたと同じである。とある文豪は語つたが、女性の心理ほどデリケートなものはない。句主のメスもかなり大胆さはあるが、まだ〳〵浅いと思う。

ボールペンくるくるくると嘘も書き　（おさむ）

抱逸＝終戰後から急に流行のボールペン、仲々器用に働き如才なく遇には嘘も書き、圏もせねば人間らしく扱われない現今、世渡りの助けとしてその動きもやむを得ないだろう。人生はすべからくと要領を教えている。併してこの句主の皮肉な観察はむしろ興味を感ずる。

水車＝「ボールペンくるくるくると嘘も書き」と逃げたのは常套的だが、たしかに老巧、時代色もうかがえる。

山雨樓＝皮肉と軽いユーモアを漂えているが、それも嘘と云う一字に託した甘さがあり上すべりがある。句の面白さは中位と云うところか。

不二＝ボールペンそのものが軽妙なものであるだけに、それを取材したこの句も亦至極軽妙なところに当を得て成巧と云う感が深い。あまり分析して考える必要のない軽味の句と云うことができる。

久米雄＝ボールペンだから嘘も書けるのか、鉛筆では、筆では万年筆ではとむつかしく考えれば妙なことになつてしまうが、ほんの軽い氣持で玩味すれば軽味の句と取れる。深味はあまりないように思われる。

ゆく末は此の子にかかる子を抱いて　（笑泉）

抱逸＝路郎先生の「俺に似よ俺に似るなと子を思ひ」の句を直ぐに思い出した。子と云うものは何人生んでも可愛いもので、一人息子か七女一男ときたら、それこそ眼に入れてもと云うところ、まして行末をたのむ息子だもの、丸く纏つた特に氣持のよい句、お父さんの有難味、子供の幸福さが泌みじみ現われている。

水車＝下五が少しもの足りぬ。何か感激的な具象化がほしい。しかし抱いている事に愛着と満足を覚えている心境はわかる。

山雨樓＝感慨或は述懐としての感度が、凡人凡情的である俗の眞を衝くのが川柳本來のねらいであつて見ればこの句は誤つてはいないが、手ぬるい感じは覆いきれないチトピンボケの感がある。更に今一つ非難を加えるならば、句に特異性のないことだ。万人の持つ共通的な方から脱け出ていないと云える。作者ならでは表現し得ない感激を云うものがある筈である。それを浮彫するところに、藝術としての價値があり迫眞力が備わつてくるわけだ。この句はそう云う点から見て、一つの素描に過ぎず、この句の奥に秘められた眞珠を磨き出すところまで至つていないと思う。

不二＝子のない僕には批評をする資格がない。ただ羨ましい雰囲氣の句である。日本家庭のよさは、どの角度から作句しても常に暖味が溢れていて嬉しい。父子の情の表現に新鮮味がないのが、むしろこの句の強みかも知れない。

久米雄＝子に対する愛着と希望とは覚えるが、下五の表現をもう少し推敲することによつて、この句はもつと生きて來る。親と子の心のむすび方にいま一歩の工夫が必要だ。

五世 川柳 鯉齋佃（中）

冨士野 鞍馬

佃島の魚問屋鯉齋佃は、文政の狂句界にその識見と実力を示し、川柳宗家を継ぐ者はこの人であるといふ人望を担つてゐた。それで文政十三年の「柳多留」百十編と百十一編に序文を書いてゐる。

――百十編の序――

十囲にして大きやかなるも、百尺にして丈高きも柳のいさほしなりければ、から國のかしこき人も柳をめづることすくなからず、また清水流るゝ柳陰には西上人も腰を抜せたれど、風雅に枝折してゆくにはかわ柳にしく物あらじ。珍文漢文のむつかしき道に入らず、風になびくの緣ありてさりきらひなく、滑稽和らぎておかしみあれば、見るもの腹をかゝゆるの能あり。予もこれを見かへりて思はず笑ひを発し、あぎとの掛金をはづし、だらりと明たる額任せ、百十編の序をのふることしかり。

文政十三寅の仲馬、東都辰巳の島人佃

――百十一編の序――

柳樽は人の心を種として、よろづのこと見る物きく物につけ、五七五に言ひ出せるなり。鶯蛙はものかはいきとしいける物、何れかこのまざるはあらじ。遍正も是を見ばいたづらに心をうごかし、黒主も立寄つて見てゆかむ事を思ひ、在中將や康秀は笑ひて冠の緒をゆるめ、喜撰は我庵に求めてかへらんとすべし。滑稽に穴を穿つには、小町も額を檜扇でかくさん。猫この外の人々も一句をきかば、人わるの心も和らぎ、額赤人の堅親父も腹をたゝん事かたしといふべし。されば時うつり、ことさりたりとも、宵柳の糸たへず、まさきのかつら長くつたはりて、心をえたらん人は狂句をあふぎ、俳風をよひさゝるかも。

とらのたちはなた月

鯉斉佃戯誌

文政十三年十二月には「天保」と改元になり、柳多留百十二編から天保の出版ではあるが、その收錄句は文政時代のものが相当にある。そして四五年前から流行り始めた二字結題の作句が益々盛んになり、その年の五月、七月、八月の和歌堀連の句会で佃は次のような句を作つてゐる。

題「摺、長」結

御廊下で國の摺合ふ長袴　（一一四）

題「官、流」結

官を辞し身は風流に西へ行き　（一一四）

題「天、賣」結

煙草の火天から貰ふ賣卜者　（一二一）

正月の会には

九郎助へ祇参りする二十七　（一一九）

三月の鉄砲湯の会で

暑をさけてしばし退去の箱根の湯　（一一七）

前々年（文政十一）八月の武藏野会に

無力で帶宅仕り以後禁酒　（一一八）

十二月の柳亭種彦主催の柾木稲荷奉額に

左官は竹箒かぶら矢は大工所持　（一一六）

その前文政十年九月の名木会に

下手の拳喧嘩の稽古かと思ひ　（一三〇）

これ等の句は天保の「柳多留」に前後して收錄されてゐる。

天保三年十一月には有名な成田不動奉額大会を主催し、佃の名声はいよ〳〵あがり、五世となる決定的の地位をかため、百二十二編には四世の肖像を掲げ、それに賛辞を

嗚呼盛んなる哉、こたひの入章三万にあまれる事いまだかゝるためしをきかず。されば先生口すさみの竹の子（註四世川柳の句、出つといゝとこへ竹の子つちを出し）は、此道の栞にさかえしけりにしげらんれさしとよろこばしさのまゝ、柳樽集中初代故叟の画像にならひ、今四代川翁の面かげを写す。

千代をへん色若竹の姿かな　僅主　佃

とつけて、五十五歳の四世人見川柳を翁と尊称し、自分は四十四歳の男盛りであつた。後に六世川柳になる息子の「ごまめ」も十九歳ではじめて顔を出し『伽羅の香のある油揚の賣れること』といふ処女作を発表してゐる。佃の句は

曲物で皮にまたあふさくら漬　（一二二）

れころんでゐるが天人皆藝者　（一二二）

和らかで堅く持たし人心　（一二三）

狆に吠えられ口上の胴忘れ　（一二四）

いゝ夜具でざんすが指が痛うおす　（一二五）

諸候の義理を踏んで見る獻殘屋　（一二六）

別莊を錦でつゝむ定家卿　（一二七）

この成田大会は時の狂句界に大問題を起した。大会の入選句四千三十句を柳多留に收錄するのには、どうしても六冊になる。それを出す間は他の句会報は出ないことにもなるので当時の野心家眞砂連の宝玉斎三箱は、自分の眞砂連の会報を別途に柳多留百二十一編から四編として、又「俳風演眞砂」として出版したのであつた。それには佃が成田大会を主催して、五世候補と目される衆望のあつたのが面白くなかつたようである。又成田大会の会報から柳多留の板権が、永年の花屋から奎文閣に譲られたのにも何か事情が伏在するように思われる。

佃はこれからずつと息子のごまめと共に大活躍をして、天保四年から五世継承の八年暮までに次のような句が見える。

眞桑瓜六角堂のやうにむき　（一二八）

曲水に下戸菓子鉢を流したし　（一二九）

すなをなる柳ぞ清き神慮　（一三一）

葛掘に道筋を問ふ吉野山　（一三二）

平内は堅いが色に向く男　（一三三）

歳は三九ではきそめるこゝの文　（一三四）

左馬之助てうし下りに琵琶を乘　（一三五）

水潜り相傘の手の伸び縮み　（一三七）

あきらめて蛍になりやれと三保の漁夫　（一三八）

僧正が谷も紅葉で緋の衣　（一四〇）

独り者小鳥餌ほど味噌をすり　（一四一）

はれ釣瓶水を秤にかけるよう　（一四二）

まれきたき男を扇越しに見る　（一四三）

末廣はめでたくもなし源三位　（一四四）

何ンの木と医者にも知れぬ唐更紗　（一四五）

小夜嵐去來が庭へ柿礫　（一四八）

我袖を濡すは義理の最合傘　（一四九）

風呂敷に秘法を包む梓神子　（一五一）

藏宿は御内福にもさて困り　（一五四）

武の國にまけた〳〵は市ばかり　（一五五）

こゝをふさいだ庚申はなけれども　（一五六）

犬のたいくつ縁側へ腮をのせ　（一五七）

廿七夜も帰らぬで内は闇　（一五八）

鶯が告げれば知らぬ谷の梅　（一五九）

鍋とりも鰤宜も交つて加茂祭　（一六〇）

又右衛門上野で櫻切つて捨て　（一六一）

出る月も入る月もおる水車　（一六二）

位牌など出して意見も手をつく　（一六三）

御勇言きのふの客も今日の臣　（一六三）

笑声屋根屋禅しめなをし　（一六五）

愚も苦労利発も毋は案じられ　（一六六）

彦左老耄せられしかそれは栄ちや　（一六七）

課題吟　夫婦

大森風來子選

老夫婦明治時代を謳歌する　娯句樂

好き合うた頃を夫婦の忘れかけ　苑女

日溜りへ夫婦ごつこの膝小僧　芳泉

平凡な夫婦近所へ親しまれ　同

子を寢かし妻と二人のお茶の味　一葉

甘党の夫婦の膝のプログラム　鮎美

同棲を無視して夫婦とも達者　同

病妻の甘へた声に立つ夫　七面山

道草のいつしか叱らぬ妻となり　正一

不氣嫌の訳もう知つてゐる妻の顔　迷親子

隠し藝こんな夫とは知らなんだ　一路

平凡な夫婦を人にうらやまれ　彩峰

錄音へ夫婦でこぼす生活苦　齊花

夫婦して水着をつけた健康美　清花

夜勤する夫へ妻も負けず縫ひ　草々

夫婦して歯科医へ通う年になり　鉄宇

家計簿をゞめて夫へ正座する　吐平

仲のいゝ夫婦を夫婦見て帰へり　茶佛

税金の桁を読んでる夫婦の目　牛歩

失せ物を怒らぬ妻へほつとする　曉明

湯上りの髪梳く妻と居てたのし　孤峰

子がなくて夫へかゆい手が届き　潤年人

老夫婦互に眼鏡ゆずり合い　鉄宇

雪くち夫婦別々にしまひこみ　地

姑が寢てから夫婦何か食い　鮎美

甦光　軸吟

もう夫婦氣取りで小父の意見きく　正司

許されぬけれど夫婦を氣取つてる　如川

夫婦離れて歩いた頃の思ひ出よ　一路

手を取れば老妻食う笑うなり　弓削平

子がなくて競馬へ妻が先に立ち　同

仲人の嘘へ夫婦で笑い合い　曉明

朝寢する夫婦へ玉子産んだ声　不二

そろばんの音靜かなり夜の夫婦　夏六

妻先に寢させうかとは旅の夜　季賛

押賣へ夫婦どちらも氣が弱し　みのる

感情にいつしか負けた共稼ぎ　志津

里へ來て妻の意見へ逆らはず　曉明

のりものへいたわり合つて老夫婦　日溜子

盛装の妻へ荷をさげ子を抱いて　潤年

だまし合いかばい合い夫婦愛し合い　茶々

新夫婦送つた後は酒になり　芦穂

物干に子のない夫婦物足らず　茶佛

相和した夫婦へ赤字まだ読き　不二

案の定空巣にやられた若夫婦　夏六

夫婦とはこんなもの寄せ木細工　不味

夫婦して見る産制へ灯をおろし　鉄宇

産着縫う妻に武藏を読んでやり　幸司

小心な夫婦チヨッピリ株も持ち　志津

ひつそりと櫻の下の老夫婦　菁子

かすかなる希望へ夫婦歩を合せ

不朽洞会から

▼尼崎之助氏（出雲市）は二月十三、十四日、公用で來阪されたとのこと▼築山快夢起氏（ホノル、）がKPOAから放送されていた川柳講座は時間その他の関係で一と先づ打切ることとなつたと▼塩淡文雄氏（大阪市）は一路と改号された▼石井白面人氏（大阪市）の母堂なかさんが一月六日に八十一歳の高齢で永眠されたお悼みする▼石曾根民郎氏（松本市）が発行されている「川柳しなの」が來る八月に百号となるので、その記念号の特別募集をされるとのことである。盛会を祈る▼大森風來子氏（岡山縣）は二月下旬から日刊「新岡山」の川柳欄を担当されることとなつた、なほ同氏は夕刊山陽の第三回愛読者文藝川柳（路郎師選）の第一席（賞金千円）に当選された句は「心にくき程かつぎ屋の旅馴れて」である。▼丸山弓削平氏（岡山縣）は弓削高等学校に招かれ全学生に社会科の時間川柳の講義をされた、教育会も斯うした方面に目ざめて來たことはゆかいである。これがしげきとなつて文藝部では句会を催したそうである。▼戸倉菁天氏（兵庫縣）は温健誠実の人だけに村長としての重責を果たすため重労働よりも疲れるとのこと、今日の日本を救うため一層の奮闘を祈る。▼山分淑郎氏（岡山縣）は二月廿一日から中國配電岡山支店倉敷変電所へ轉勤された▼池沢樂居氏の「善意経」天之卷の出版記念会が三月八日午後二時から高島屋で開催され、同氏の熱誠なる講演があつて非常に盛会だつた▼藤本潤年氏（岡山縣）は山陽新聞の編局幹次長、社会部長、学藝部長、論説委員と云う長ツたらしい要職につかれたそうだが、これでは鉄のような心身を要することとなるだろう。▼川村好郎氏（東京都）は公務多忙の中から毎月東京支部の句会を開いていられる。▼田中辰二氏（熊本縣）は極く初歩の人たちを指導されるために一月以來プライヴエットのプリントで月々添削や批評をされている。▼下記の諸氏が一身上の都合で退会された。

山林正思氏、岩崎山石氏、藤井友郎氏、和久洞人氏（以上一月限）
稲葉鳩花氏（以上二月限）

新会員紹介

二月

姫田夕鐘氏（徳島縣）正　蔵乃女史推薦

福島鉄兒氏（岡山縣）正
藤本茶々氏（岡山縣）正
直原湖月氏（岡山縣）正
黒田久米女氏（岡山縣）正
以上弓削平氏推薦

四月

塩淡一路氏（大阪市）正
谷内一草氏（京都市）正
福本麗骨氏（大阪市）正
太田木声氏（池田市）正
松崎五馬氏（大阪市）正
清沢柳清氏（大阪市）正
布村南扇子氏（大阪市）正
鮎美氏推薦

高級化粧料容器には勿論！
ヤマギンの……
黒硝子
大阪市南区大宝寺町西通一丁目四番地
山銀株式會社
電話堺七四四八番

いのちある句を創れ

花地図

投稿清規
▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月廿五日▼投稿先本社宛

本社二月例會

二月四日　午後五時三十分
於大宝文化会館

新年句会に次いでの賑やかな句会だつた。莢豆、乱玉、恒明氏等も珍らしく顔を見せた。路郎師の柳話は例によつて熱弁そのものであり、鮎美氏の句評、作品の披講、ベストテンへの賞品の贈呈で会を閉ぢた。今月の不朽洞会賞の受賞者は中島生々庵氏であつた。家内がホンマだつかいなと云うだろうと大潮悦。猛者揃いだけに次回は果して誰が栄冠を担うか。（幹事）

出席者＝路郎・莢豆・乱玉・靖眞・香林・鮎美・文蝶・朝夫・修三・春草・水都・春柳・淡舟・愛論・豆秋・正司・白香・緑雨・芦穂・生々庵・すゝむ・梅志・花村・星登・春巣・博也・恒明・白柳子・種美・勢三・季替・梅里・晴峯・與三郎・瓜平・里十九・翠光・万滴・青丹子・琴・茂乃・梨里

兼題「立退き」　廊生　路郎選

立退きのやはり雑巾がけをして　美秋
立退きの跡いたづらにほつとかれ　春草
税務署が建つのでサツト尻を上げ　無名林
立退かせペンペン草を生やしてる　星登
立退きへ一應こてゝみるつもり　博也
立退きへ母はおろ〳〵するばかり　同
立退きへ近所の意見まとめて来　同
立退きが我家の奉をくつがへす　愛論
愛着もあつて立退き涙ぐみ　美秋
立退きの相手大阪市に困り　乱玉
水底になる古里をふりかえり　修三
リヤカーで立退く世帯夜逃げ染み　白柳子
忠兵衛と立退く草履買いにやり　同
立退けと都市計画の線を引き　豆秋
弁護士をいれて二階を出てもらい　同
立退きへ女世帯とみくびられ　青丹子
立退きのあと一軒が落ちついて　春草
滞納が立退き先へキッチリ来　六角
立退きが決り向いと仲違ひ　栗
立退きへ軽くはぢいた市の予算　香林
焼夷弾つまみ出したに立退と云ひ　同
立退きの少さなぐちを軽くきゝ　恒明
人さまの立退き料が氣に掛り　春巣
立退きなすびは花のまゝに枯れ　文蝶
立退きへ身寄少ない子沢山　勢三
飄々と立退き机と原稿紙だけ　晴峯
立退きへ頑張り通す孤独ほし　葉光
窮の立つ立ち退かせたへ二号入れ　生々庵
ダンヒルを咥へ立退くとも言はず　野介

兼題「スター」　武部　香林選

歩き振り迄もスターの眞似をして　青丹子
スターにもなれぬ父なし子が産れ　愛論
ショウガールスターの夢を捨てきれず　瓜平
婦人雑誌へ書く身の上をスター持ち　春巣
銀幕と別にスターの悩みあり　春草
大部屋へスター冗談云ひに来る　博也
自傳など書いてスターは年をとり　同
三階の客へもスター顔を向け　同
桟橋で田中絹代の艶を見る　豆秋
脚光を浴びたスターの爪光る　鵜足
ゴシップが何さとスターまた泊り　水都
群衆のうしろ絹代へのぴ上り　乱玉
サインから逃れてスター煙草喫よ　淡舟
楽屋番スターの紐を知つてゐる　里十九
大部屋はスターの夢で暮れてゆき　與三郎
夢はまだ捨てじスターを憧れて　春柳
三人の母です映画スターです　文蝶
ごぼー抜く様にスターは引抜かれ　星登
映画とは別にスターは恋に泣き　文蝶
スターふと一人で居たい時があり　美秋
銭湯で会うてスターの細いこと　里十九
光るものばかり身につけスター出る　美秋
役なればスターもつらい津軽弁　朝夫
種美
保険つけたスターの足を知らぬ蚤　生々庵
あの人へすまぬキツスもするスター　翠光

兼題「たゝき賣り」　清水白柳子選

店仕舞いつするのやたゝき賣り　花村
たゝき賣りたゞより安いわに言い　乱玉
叩賣りやつぱり買わぬことにする　水都
たゝき賣り金のないのに取巻かれ　野介
たゝき賣りの方も感心する世相　春草
叩き賣ります前列の子を叱り　水都
たゝき賣りしかしバナゝはなかつたよ　笛生
たゝき賣り迷ふ男を叱りつけ　香林
少々は客に毒付くたゝき賣り　修三
たゝき賣りからも甲斐性なにされ　梅志
たゝき賣り未だ税金に追つかず　淡舟
隣りのも賣つてゐるたゝき賣り　里十九
たゝき賣りものも物だが値も値なり　愛論
盗つて来た品ではないたゝき賣り　春巣
たゝき賣りで買ふたと知ちず子の笑顔　香林
たゝき賣りへほろ酔いきゝす氣でならず　梅志
客散つてたゝき賣屋は煙草にし　万滴
もみくしやに金を積んでるたゝき賣り　恒明
たゝき賣りした事もある立志傳　晴峯
たゝき賣りドッジラインの上に立ち　乱玉
叩賣りあまりの声に子を泣かし　美秋
たゝき賣りツイ國の舟買ふてくる　無名林
表紙また替えて賣つてるたゝき賣り　愛論
職探す足とめさしたたゝき賣り　正司
たゝき賣りの声が途切れた向い風　青丹子
たゝき賣り寒い銀行の門の前　種美
参道をせまくしてゐるたゝき賣り　芦穂
たゝき賣り店をたゝんだ雪もよい　青丹子

ペーブメント

たゝき賣り　舗道の砂埃り　晴峯
たゝき賣り家に戻れば無口なり　恒明
たゝき賣り夫婦でシャツを買ふて行き　青丹子

席題「別居」　北川春巣選

住宅難心にもない別居です　生々庵
別居して月のあかりをほめちぎり　鮎美
別居してゐるを政治のように言い　乱玉
別居した父忽然と戻つて来　鵜足
別居すゐ妻の写眞の目が光り　修三
別居して以来親子のむつまじく　すゝむ
別居して春の霞の中に居る　翠光
別居した妻へ養生法報らせ　晴峯
又別居せよと無情な聴診器　勢三
終戦後五年別居はそのまんま　芦穂
別居の身アベックやたら目にとまり　正司
口丈は氣樂ですよと言ふ別居　修三
別居して妻の辯などなつかしみ　万滴
別居して冬の夜長を持て余し　文蝶
東京へ生世なさつてから別居　豆秋
別居ふと郷里の家族想ふ夜　春草
別居してからよく賣れたペンネーム　勢三
よく肥へたことはつかりをいふ別居　朝夫
別居して水の不便を感じる日　文蝶
靴音を別居の妻は聞きわける　晴峯
ウイークエンド別居の妻の顔浮ぶ　春巣

席題「置手紙」　住田　乱玉選

待ちぼけの恨みを残す置手紙　翠光
灰皿をおもしに乗せる置手紙　瓜平
接吻をしてから開く置手紙　與三郎
旦那様とはしほらしい置手紙　梅志
配給とつておいて下さい置手紙　同
三度目で効目がうすい置手紙　勢三
仲人が飛んで來るなり置手紙　文蝶
日を一日間違えている置手紙　春巣
最後迄世話をやかせる置手紙　春草
アドルムと一緒に並ぶ置手紙　愛論
親馬鹿を知りつゝ嘆ぐ置手紙　朝夫
置手紙死で償いをする積り　春草

阪田謄寫版

大阪市北区芝田町二五

株式会社　阪田商会

電話　福島一六三九番

パーマかけたそのあくる日の置手紙　春巣
置手紙した母親は戻つて來　鵜足
人様の娘と死ぬらしい置手紙　朝夫
氣が付けば懐にある置手紙　花村
座蒲團の温みのあとへ置手紙　鮎美
置手紙彼に関して二行ほど　乱耽

席題「鎌祭り」　互選

長女次女三女へ鎌の色紙丈け　修三
末の子がダダこねてる鎌祭　里十九
よち〳〵と手傳ひに來る鎌祭　翠光
ひな祭り外は静かな日本晴　すゝむ
税金をやつと納めた鎌祭　梅志
鎌祭りラジオにあはす賑やかさ　鮎美
青い眼の人形もあつて鎌祭　春草
鎌祭二階の人も來て座り　文蝶
学校を走つて帰る鎌祭　豆秋
鎌祭母も良い子になつてやり　春草
妹の客が來てゐる鎌祭　博也

雑川　**大阪南支部句會**（大阪）

二月廿四日　於　王子神社

泥・酔ざめ・焼いも・風邪引き・ネオン

泥まぶれ　訳など言はぬ男の子　茶目
健やかさ今日も今日とて泥だらけ　恒明
兵隊の想出泥の道続く　文蝶
夫を奪ひし黄河の泥のごとく堕ち　千峰
春泥へ明日の思索が突当り　文蝶
泥靴をさげて玄関から上り　種美
泥んこで帰る子供の喰いつぶり　亜鈍
まゝごとの主食はどれも泥ばかり　美秋
栄冠へ泥にまみれたユニホーム　たゞん
ダンサーが上手に泥をよけて行き　春柳
足許の泥を忘れてたこを上げ　文蝶
アロハシャツ泥ぬったとかぬらぬとか　正司
遠慮なく泥靴で來る集金屋　紫香
仲良しは泥んこのまゝ座はつてる　春柳
晩までにどぜうの泥を吐かす水　角嵐
ぬらりくらりどじうは泥に開く眼もち　亜鈍
豆選手泥にまみれてホームイン　九尾
不憫なるかな泥のように女眠る　亜鈍
泥泥泥果てない道を今日も行く　野介

子は風の子デボチンへ泥つけて　豆秋
酔がさめたかと交番で言はれしゐ　同
酔さめて勘定書をじつと見る　晴峯
終点に運ばれて行き酔がさめ　野介
酔ざめを待つて言い度いこと一つ　角嵐
酔ざめてちぎれ〳〵の記憶追い　亜鈍
酔ざめにまだ冷酒の要る旦那　梅里
酔ざめの眼に絹夜具の赤い花　葉光
酔ざめへひとりぼつちの音になり　紫香
弱点に触れていつしか酔ひざめ　春柳
酔ひざめへ勘定書かつき出され　正司
酔ざめを待つて無心を繰り返し　美秋
酔さめて下戸にしたゝか意見され　種谷
酔ざめの水に理性をとりもどし　梅里
やきいもを右と左のポケットへ　豆秋
自家用は別に焼いてる焼いも屋　恒明
焼芋や出來たも知らぬ上戸連　トラニ
やきいもの手土産貧しけれども温かし　亜鈍
焼いもをフォークでさして地下で賣り　角嵐
やきいも屋お客へ遠いほかり据へ　文蝶
やきいもも焼いてましたこ迎えられ　正司
オフイスの裏のやきいもそはやり　同
焼芋の屋台は赤い旗を立て　竹荘
百円のお客も平氣やきいもや　文蝶
ダンサーのハンドバックに焼いた芋　野介
紅少しつけて焼いも喉を過ぎ　千峰
焼いものゴマを前歯にぜうぜつな　角嵐
やきいもや軍手の方で裏返し　同
焼いもの店へたゞふハイヒール　梅里
酔うている間に子へのやきいもさめていた　亜鈍
模様替へしたと思へば焼芋や　梅里
ナイロンの風呂敷包み焼いた芋　彦
鍋料理出來て風引起される　竹荘
風邪ひいて呑んで〳〵なをつたり　亜鈍
待つて待つて橋の袂で風邪をひき　豆秋
風邪引いてますとつき合断る氣　文蝶
薬局で風邪ですかとはあつりなし　春柳
風邪などでねてる暇ない金詰り　野介
かぜ氣味の声で惚氣をきかされる　正司
かぜ氣味の早寝へ妻はマスク縫ひ　同
聽診器なんだ風邪かと笑つてる　種美
おいらくの恋が伸よく風邪をひき　同
風邪の子を眞ん中にして宵寝する　角嵐

裸レビユー観てる者が風邪ぞひき　種谷
先方も風邪をひいてる電話口　紫香
ネオン消今日のチップをかぞへてる　亜尖
かき船のネオン見下すことで待ち　角嵐
大阪はもうすぐですネオンの灯　文蝶
ネオンもう昔の濁る川と知る　葉光
アイシヤドウルージユの色に照るネオン　彦
虚無僧にネオンの露地で今日も会ひ　正司
相びきに何かぜつないネオン灯き　晴峯
誘惑のネオンへ寂しい靴の音　春柳
どら声でネオンの下をくぐりぬけ　晴峯
儲ければなるほどネオンの派手な色　葉光
恋もなくネオンも消えて終電車　亜鈍
横手から警邏がぬけるネオンの灯　紫香
生きんためネオンに泳ぐ指細し　野介

雑川　**大阪北支部句會**（大阪）

十二月　於　阪急十三保線宿直室

三枚目・ダモイ・豆でんき・空腹・鉢巻

三枚目　父の映画は子に見せず　正司
三枚目だまつて蕊を終る幕　古方
三枚目準備の要らぬ声になり　水客
名人といわれ三枚目で通し　同
三枚目ひよつこりでて來て笑わせる　春柳
ひんがら眼のまゝで賣れてる三枚目　古方
舞台稽古眞面目な顔の三枚目　春柳
お茶のみに來れば眞面目な三枚目　紫香
出ただけでもう笑ひ出す三枚目　同
さんまい目仲居が逢いに來る也　鮎美
飯だけは師匠にまけぬ三枚目　香林
三枚目一人でさらつた映画評　正司
廃業をしてと子が言う三枚目　駅平
看護婦の心につめたいダモイの目　春柳
唯神に祈るダモイの今朝の霜　同
涙無き如くダモイは赤旗により　香林
思想など楽じ港にダモイ待つ　正司
ダモイする夫の愛を疑わず　同
動揺をのせてダモイの海静か　古方
未亡人ダモイに寄せること多く　鮎美
ふるさとの月はダモイの肩にあり　同
湯望のダモイへ冬の港町　同
靴はもうダモイの土を踏んでいる　水客

雑草の匂ひダモイの春想う　同
愛慾は忘れてダモイ日向にい　鮎美
豆でんき場末の店につく寒さ　紫香
寝つかれぬ母豆電氣淋しがり　若菜
もらい風呂紐が解けない豆電氣　同
窄体がフツと氣になる豆電氣　同
豆電氣福引のある店につき　紫香
二つ三つ消えた模型の豆でんき　同
パノラマのもう夜〳〵なる豆電氣　香林
こおろぎの死んだを照らす豆電氣　同
盛逢えした薬局の豆電氣　駅平
飽くことを知らぬ夜更の豆でんき　鮎美
豆でんきおいとけばりの部屋のいろ　同
豆でんきふつと眞顔が美しい　水客
すき腹へまだ玄関に客が居り　紫香
すき腹へネオンきれいな色さなり　同
空腹に下手な演説まだつゞき　正司
空腹へ警官の慈悲あたゝかし　春柳
いつそ死んでしもうか腹がへり　同
靴すべり腹のへつてる顔になり　水客
ローツクの灯が空腹へ斜にゆれ　紫香
鉢巻のまゝで聞いてる御用聞き　白溪子
鉢巻をしたは一と臼搗くつもり　駅平
恐縮のとき鉢巻はちとあわれ　香林

鉢巻を廻場で借りる隠し藝　紫香
面白い程鉢巻でおまけする　同
鉢巻へねつかから貰れぬ明石鯛　鮎美
鉢巻に亭主のきげん見せている　水客
鉢巻をしめやぼくさい酒を呑み　香林
地車へさらの鉢巻出してやり　古方

雑川　**東京支部句會**（東京都）

一月廿一日　於　島野ビル三階

川村好郎報

松の内・炬燵・手遊び・奥の手・君

看護婦の私服を知つた松の内　白星
松の内遠慮してゐた請求書　高志
松の内遠縁と言ふが尋ねて來　ひろし
適齢と云ふ奏で來る松の内　不二
松の内過ぎれば女房もふけて見え　登志
松の内言葉付きにもかしこまり　東夢
五年目の朝湯嬉しい松の内　千東
一級酒足りないまゝで松の内　山雨楼
松の内過ぎてそろそろ小言が出　ひろし
下戸の手も少しあがつた松の内　不二
松の内間貨の人も呼んで飲み　ひろし
割烹着が離せぬ妻の三ケ日　好郎
本宅へ帰したくない炬燵なり　登志
帰郷して話盡きないほり炬燵　好郎
お迎えが近く炬燵を離れない　山雨楼
こたつにも二号ともの柄を見せ　不二
老いらくの恋は炬燵でお茶を入れ　白星
手遊ひの貴は負はない避姙藥　山雨楼
手遊ひのまゝ幕になる村芝居　同
手遊ひは誰にもあるといゝ主人　白星
手遊ひが重なり八卦みてもらい　好郎
手遊ひへせめて誠意をみせる汗　同
奥の手と知つて家政婦ひまを取り　不二
奥の手の子の本代を云ひ出され　白星
奥の手は女房荷物をまとめかけ　同
奥の手のハンドバックを買つてやり　好郎
石嶺代馬鹿にならない子沢山　高志
石嶺を何ときたない顔で貰り　東夢
石嶺でものにしたとわうそのやう　千東
石嶺にねずみの歯形問借りなり　ひろし
物知りの故に石嶺もなめてみる　東夢

君と書いて良いか思案の日記やり　ひろし
君がもうオイに変つて子が生れ　好郎
君一人どうにかなるでものにする　高志
君らしくないと言はれる零落さ　東夢

雑川　**日立櫻島支部句會**（大阪）

稲葉鳩花報

年の暮・貧つき・追羽根・残り繭

何かしら落ちてゐそうな年の暮　潮花
並んでゐる子ちぎつてる貧搗き屋　鳩花
貧つきへ女世帯と言ふ暮し　定美
追羽根へ賀狀を渡す郵便屋　鳩花
おとなしく今日追羽根の恋である　秋花
追羽根は裾を氣にした方が負け　一坊
羽子板へ綺麗な意地の羽根が飛ぶ　潮花
子のふへて夢も大きい宝くじ　鼓秋
願笹の百万両が背で搖れ　定美
残り繭どうかワテにと言つた顔　早苗

雑川　**下關支部句會**（下関）

一月廿三日　於第一鉄道寮

國弘半休門報

信頼・外套・火事・刺む

噂には耳をかさない友と生き　ほなみ
輪になつた中の一人を皆信じ　恵流
眞先に信頼したがサクラなり　海朗
極秘狀信頼された手がふるえ　秋無草
信頼をうけて休みも刈り出され　哲志
外套に包む世間の風強し　十字星
外套はそのまま〳〵と出す碁盤　石洞
外套を脱いで商賣見破られ　秋無草
外套を脱ぐ履歴書の手がふるへ　司楼
診断をわびしく外套の中に待ち　松風
軍隊の外套悪夢をよびさまし　ほなみ
外套も子に着せている夜の汽車　九呂平
カワウソへ搾取の顔を深く埋め　海朗
恩給もついた外套の色が褪せ　素人
外套もなく安定所の列に立ち　九呂平
山火事の方へ寄つてる汽車の窓　赤とん坊
消すように見えず山火事強くなり　十字星
火事跡で再起の投賣りもう始め　九呂平
オーバーを引つ掛け火元見て返り

金檜におじけず火事は燃えて行き　多辻
幼能を逃べ逃べ刻む漢法医　海朗
葉煙草を刻んで罪の手がふるえ　勇記

雑川　**大牟田支部句會**（大牟田）

一月廿日　於三池染料保安課

高田抱邊報

標札・アルバム・臨時・珍客・想像

間借りしていて標札屋を覗き　波人
標札屋吉田茂も刻つてあり　つねお
捨てきれぬ虚栄偶居と書いてあり　枯柳
アルバムへ妻に言へないのが一人　同
アルバムに生きてる様な母を見る　抱邊
アルバムの古き明治の恋を見せ　波人
アルバムを伏せてそれからキスになり　枯柳
アルバムへこんな顔した時もあり　扇波
年頃の写眞アルバムから盗られ　抱邊
臨時牧人子には寒い目させぬ腹　抱邊
スクリーンを横切るだけのエキストラ　つねお
安定所臨時ばかりを恩に着せ　枯柳
臨時雇閑な役所に落ちつかず　波人
女秘書臨時昇給して怖く　抱邊
生きてましたかさは珍客恐れ入り　枯柳
珍客のいきなり嫁の事に触れ　一葉
米提げて來て珍客は叱られる　抱邊
想像の通り秘務署飲みにくる　薫風
想像の通りハガキで断られ　波人
想像に委せる積りだまつとき　枯柳

雑川　**八代支部句會**（熊本縣）

一月七日　於矢勝耕石居

佐野卜占報

火鉢

公賣へうちの火鉢も抛り出され　実・信
人を待つ炭の燃えつく音もよし　愛子

一月二十二日　於佐野卜占居

声・十八九

晝と夜社長の声が違つてる　漂月
実力を過信しすぎる十八九　実信
十八九父共学へ氣がもめる　狸村
寄附帳の末尾はいつも俺の役　斗四翁

毋袋未知庵著

川柳信濃國

信濃へあこがれを持つ人は多いが、ホントの信濃を知つてる人は尠ない。先づ本書によつて江戸文学から、信濃を探れ！　B6　100頁　三三〇円　〒三五〇円

發行所　しなの川柳社

松本市大名町七一

雑川　**弓削支部句會**（岡山縣）

二月四日　於森尾不老居

丸山弓削平報

猫・見込む・傘・投賣・祝・ヒント・小包

うつ憤のやりばへ猫が蹴とばされ　久米女
脇腹へ猫すりよつて〳〵　茶々
妾宅の猫流し眼で人を見る　十九平
両親の見込んだ人の顔がいや　満〝年
見込まれて負債整理を背負はされ　老骨
見込まれて養子茨の道となり　久米女
旅先の雨へ粗末な傘を買ひ　牛歩
一年生傘がジョウゴの様になり　老骨
相合傘雨のやんだも知らずにい　旭江
傘の穴後へ廻す小さい見栄　鉄兒
迎へ傘序で〳〵をことずかり　茶々
すれ違ふ傘から匂ふ薄化粧　久米女
投げ賣りと云ふが儲けはとつてあり　幻火
投賣りの理由もつともらしく言ひ　牛歩
投賣りの様に嫁いで直ぐ戻り　七面山
金策に行つて投賣買つており　夢成
祝酒飲む時だけは父が行き　巽
お祝の端に我名を連ねとき　七面山
名演技町で拾つたヒントから　茶々
留置場の寝言刑事は見のがさず　満年
小包の中味盗られたまゝで來る　剣峯
小包はねんねこもあり足袋もあり　不老

小包に似たり白木で子は帰り　朗笑
投げられた小包ゆがんだまゝで著き　淵年

雑川　姫路支部句會（兵庫縣）
一月十五日　於　樹甫居
狩野燕子報

酒・若草・誤解

かんざめを砌に落す松の内　一笑
金鈔はお互様と飲んでいる　揚甫
若草にぬぎすてられた紅い服　樹甫
退院の日を若草の庭にいる　揚甫
羽子板が買えぬと知つてせめもせず　凡夫
ついていた羽根トラックにさられた　和水
兄妹げんかのもと羽子板が一つなり　揚甫
羽子板の羽根の行方はそれっきり　一笑
羽子板に道を聞いてる松の内　燕子
とゞのつまり警察にまで誤解され　和水
誤解した事も有つたがいゝ夫婦　燕子

雑川　貴生川支部句會（滋賀縣）
一月三日　於黄瀾美秋居
木下観月報

ダンス・晴着・香水・声色・手紙・傘・嘘

ホールから出てきざつぱい歩きよう　水車
ダンスすると言へば不良に思はれて　幸子
トウダンスまるで飯粒踏んだよう　聖正
此の頃はダンスしてます靴のつや　春集
ダンスなど習つてるらし歩きぶり　文子
ちとあせた晴着で年始すませたり　木人
四五人で晴着を着せる賑かさ　豆秋
家計簿を忘れた様に晴着買ひ　都夫
二三滴ふつて貰つた女秘書　鮎美
香水もふつて長病診てもらい　春集
アチラ製です香水見せただけ　水車
声色で効を奏した電話口　木人
一つおぼえの声色は酔うてゐる　春集
笑はれただけで声色引きさがり　美秋
声色屋ホンとの声で子を叱り　水車
声色の沢市ゝあんは目をつむり　豆秋
こんな子し覚えたらしい子の手紙　聖正
封を切るまでは失恋とは知らず　文子
陳者と書いても一度盗すり　豆秋
子の手紙都会は金の要る処　聖正
待ちぼうけ傘のしっぐが気に障り　春集
すゝはらい返しておくれた傘も出る　利枝
子沢山大中小と傘を干し　春集
上役の傘へ入れば肩がぬれ　聖正
お上手な嘘をきつゝ酌いでやり　豆秋
嘘ついて少しさびしいかへり道　里十九

日の丸句會（鳥取）

一月九日　於工場事務所
河村日潤子報

会・夢・雪

会合へまさかの人がきてしらけ　日潤子
夢は飛ぶ夢はとぶ〳〵十八九　秋男
温泉の宿雪に明け雪に暮れ　同
元旦のやうな気のする雪が降り　傳市
出よ今宵雪女でも我抱かん　日潤子
ふるさとは五尺の雪に驚かず　朱雀

作句練習會（呉市）

一月十四日　林野麗光居

挨拶のあとは相手が首ふて呉れ　あざみ
約束の時間気になるホームラン　秀香
草野球子供にコーチして貰ひ　史浪

川柳不朽洞會

指導　廊生路郎

賛　池澤樂居　長谷川一徹　笠原路生　長野晴濱　藤村作一　浅田酉島○丸　末弘巌太郎　中田守雄　白川朋吉　中村祐吉　高安六郎　藤村雅光　田中辰二

洞友　鳥山一歩　沖野岩三郎　亀井晨修　戸倉普天　浪玲之介　小川静観堂　上田翠光　米本貴志子　大西八歩

不朽洞會員（特別賛員）
田村孝之介　高尾堯雄　山本雨迷　安川久留美　山路閑古　前田伍健　柴谷宰二郎　蛭子省二　廊生葭乃　橋本緑雨　高鷲亜鈍　澤田四郎作

（維持會員）
福田妄夢　西垣錦風　北川春巣　岡村路三　川村好郎　濱田久米雄　木村孤浪　築山快夢　西尾翠　山東路城　高田抱邀　永田里十九　清水白柳子　石浦柳水　鈴木九拔　小田沙兆　小川恒明　市岡暁舟　内藤草一郎　三輪晩翠　水谷鮎美　村松夢裡　大坂形水　藤岡至藪　井上湧三　北林松代　宮田不二　福田山雨樓　寺井錠々　石井白面人　戸田古方　前山北海　古川麓花麗　高澤一浪

（賛助員）
竹内潮花　水谷竹荘　白牛奇朗　林野麗光　河村日潤子　西垣竹青　西森花村　小林文月　長野井蛙　田代春四　黄瀾美秋　藤本潤年　西口如川　上田春柳　間島青丹子　阿万万滴　家沢舞花　竹田芦穂　天風小次郎　藤田翠泉　小橋隆如　分山冬郎　川村好郎　尾崎方正　布施筑川　永谷琴水　北川春巣　弘津柳慶　月原青明　大西野介　吉田圭井堂　小坂慈雨来　杉谷湖山　科禁種　友淵貴山　姫田夕鐘　愛論　下柳堂　大西良子　森太田　白星　根山彦　橋本茶々　結東雀　弘牛休門　佐野卜占　国鍾　瓜平　太田忠八　小澤史葉　篠山筍彦　小西無鬼　渡邊孫拙　大鶴喜由　小田垣蝸牛　久連松春月　稲島正則　藤田わたる　伊藤定美　丸山弓創平　直原七面山　稲本鬱骨　谷内一草　松崎五馬　太田木声　清沢柳清　布村南扇子　黒田笑泉　上林粗影　狩野燕子　岩崎樹甫　石岡正司　黒川紫香　橋本美奈子　多田一波　中内翠芳　亀井晨修　戸倉普天

市場浪食子　八竹正柳　在間小楼　富岡淡舟　石原伯峯　山口秋花　岡田紫雲　木下陶王　中島鐵洲　土井文蝶　東田晩月　仮降白香　吉田水車　須崎豆秋　大森風来子　岡島嶺泉　中西おさむ　石曾根民郎　正本水客　新川博也　糸本醉月

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿五年四月一日發行第五卷第四號・
（毎月一回一日發行）　創刊大正十三年・通卷二百七十五号

編輯室にて

▼雑誌が定期的にキチン〳〵と出ることは他誌であつても氣持ちがいゝものだ。まして自分が携はつている雑誌が、月の初めにキチンキチンと刊行される欣びは大きいそれだけに、他誌の罹刊、休刊には心から同情する。▼戰爭で國民の一人々々が心の安定を失つていたが、敗戰五年後の近ごろではよほど落ちつきが出て來た。長い間荒蕪地になつていた川柳の畑も耕作の仕樣では相当の收穫もあろう。近來一段に作句熱も上昇して來た。一層の努力を期待する。▼本号の表紙（輪タク）は若田清画伯の力作だ。過日プロ野球の選手が輪タク二〇〇台で大阪のメーンストリートをノシ歩いたが、一種の物凄さがあつた。同じものでも箇として觀ると、ノンビリした味があつて面白い。▼学習院の教授のブライス氏の川柳や俳句の近業に対して、ジャーナリズムがジヤン〳〵囃し立てゝいるが、肝心のブライス氏が頗負けしなければ俳である。外人がどうとかしたとか云つていゝ氣になつている氣が知れない。ブライス氏の挙げる例句を見れば、どの程度の研究であるかが判る筈だ。川柳に対する理解はブライス氏よりも、グレン・ショー氏の方が遙に優れている。しかし、外人にしてあれだけの研究をしていることを考えたら、川柳人はモツト〳〵勉強しなければならない。▼元号廢止が問題になつているが、問題にするほどの問題ではない。対外的に必要な場合は從來でも西暦を使用している筈だ。國内的には明治時代、大正時代、昭和時代と云つた方が、判りがいゝ。なんでも世界に歩調を合はす方が便利だと云うのなら、先づ言葉を世界共通にする運動をやつた方がいゝ。それこそ世界の平和運動の第一線の仕事となるだろう。川柳も世界語で発表されるようになれば、世界中の人たちが読んで呉れよう。▼私は近ごろ、チヨイ〳〵呑む。毎日、連絡所へ出るので疲れる加減もあろう？呑むとまだまだ元氣で、往年の路郎が首をもたげる。もう一ト働きする積りだ。來月から又川柳の旅がはじまるから忙しくなる。▼いゝ時候になつた。連絡所から青空を眺めているのは勿体ない。一ツ吟行の計画でもやろう。（路）

―動静―

▼本社三月例会は三月四日午後六時から大宝文化会館で開催▼川雑南支部句会は三月十八日午後六時から阿倍王子神社で開催▼大阪逓信病院川柳会は三月十一日午後二時から開催▼南区医師会文化部川柳会は三月廿二日午後七時河瑞川村居で開催▼南海鉄道川柳会は三月廿四日午後四時半から開催以上何れも路郎主幹出席▼川雑久賀支部句会は二月廿六日路三居で開催▼川雑岡山支部句会は三月廿五日午後一時から駅弘済会写真部で開催▼川雑出雲支部新年句会は一月廿二日に開催出席者四十数名盛会だったとのこと▼川雑貴生川支部句会（滋賀縣）は三月六日、山脇和夫居に於て開催奉集氏出席▼芦城川柳社（小松市）では市制十周年記念川柳大会を五月末に開催する由▼松山中央放送局では放送開始二十五周年記念番組の一つとして三月廿日午後十時から前田伍健氏の行司で放送川柳相撲を全國へ送るとのこと▼長崎縣下川柳大会が二月二十五日長崎図書館に於て開催され意義ある集りだったとのこと、出席者八十五名▼安井ひろし氏（兵庫縣）は昨夏來糖尿病再発目下静養中だとのことであるが、二月廿八日本年で満二十年になる欣女さんの道悼会を催されたとのこと▼千原庸司氏（貝塚市）は旧冬危篤狀態に陥り、輸血して漸く危期を脱し、二月十五日頃人ごこちがつかれたとのこと一層の加養を祈つている▼坂下也奈貴氏（東京都）は東京浴場の理事長を辞任された機会に日本浴場史の著述に没頭されると▼森山さわだ氏（出雲市）は一月から壯と改号された。

募集

課題吟募集

病院（十句）中島生々庵選（四月廿五日締切）

甘党（十句）正本水客選（五月廿五日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句）麻生路郎選

川柳塔（雑詠）麻生路郎選

文章（評論・研究・感想其他）（廿五日〆切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。

▼『課題吟』は何人でも投句が出来る。

▼『川柳塔』への投句は不朽会員に限る。

Made in Occupied Japan

R列5号　毎月一回一日発行

川柳雑誌　第五卷　第四号

一冊　金三〇円（送料三円）

（禁轉載）

半ケ年振替　金一九八円

一ケ年振替　金三九六円

昭和廿五年三月廿五日印刷
昭和廿五年四月一日発行

編輯兼発行人　麻生幸二郎
印刷人

発行所　川柳雑誌社
振替口座　大阪七五〇五〇